

平成二十六年

宮崎県文化講座研究紀要

第四十一輯

宮崎県立図書館

序 文

宮崎県立図書館主催の「宮崎県文化講座」は、地域文化の充実と向上を目指して、昭和四十九年度に「宮崎県地方史講座」として開設し実施してきましたが、平成十九年度に「宮崎県文化講座」と改称し現在に至っております。

例年、宮崎県の歴史・人物・自然などに関して造詣の深い方の中から講師を招聘し講座を開催しておりますが、今年度は、松本茂氏「宮崎の旧石器時代 東九州自動車道建設に伴う発掘調査成果から」、渡邊英理氏「現代文学の中の『古事記』谷川雁、中上健次、上橋菜穂子」、鈴木崇文氏「幸島のニホンザル 日本一の霊長類学は宮崎から始まった」の計3回を実施いたしました。

本研究紀要は、前述の講座の内容を文章に書き起こしたものであり、今年度で第四十一輯を迎えますが、創刊号から四十輯までの各号は県内外の様々な研究者の方々に利用され、本県の学術研究の発展に大いに寄与してきました。今後も、当館の研究紀要が県民の皆さまにとりまして、生涯学習の糧となり、また「ふるさと宮崎」の歴史や文化に誇りをもつための礎となりますことを願ってやみません。

最後となりましたが、御寄稿いただきました三名の先生方、講座開講にあたり御協力をいただきました関係諸機関に對しまして厚く御礼申し上げます。

平成二十七年三月

宮崎県立図書館長

内 护 保 博 秋

目次

一 松本 茂

「宮崎の旧石器時代

東九州自動車道建設に伴う発掘調査成果から

1
14

二 渡邊 英理

「現代文学の中の『古事記』

谷川雁、中上健次、上橋菜穂子

17
34

三 鈴木 崇文

「幸島のニホンザル ―日本の霊長類学は宮崎から始まった―」

横書きのため、裏表紙側より開始

宮崎の旧石器時代

東九州自動車道建設に伴う発掘調査成果から

宮崎県庁文化財課

松本
茂

目次

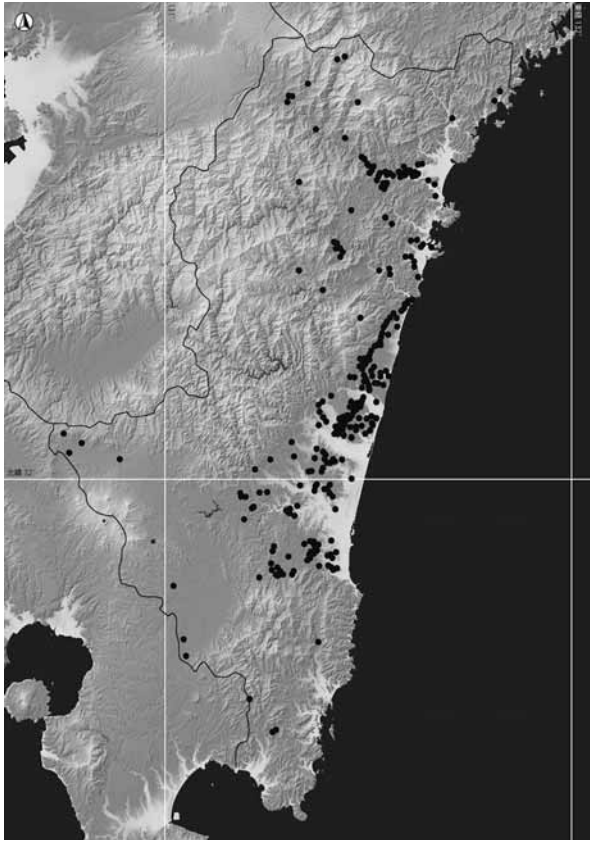
- 一 宮崎における人類史のはじまり
- 二 アフリカから宮崎へ
- 三 ホモ・サピエンス到達以前の宮崎
- 四 宮崎最古の住人は誰だったか？
- 五 旧石器時代の気候と動・植物
- 六 石器のかたちとその移り変わり
- 七 遺跡を残した人びとの暮らし

一 宮崎における人類史のはじまり

旧石器時代という時代を、学校教育において詳しく教えることはほとんどないが、私たち人類が誕生して以来、その歴史が展開した大半の時間はこの時代にふくまれる。宮崎も例外ではない。

今日までの考古学的成果によれば、宮崎では二五〇箇所以上の旧石器時代遺跡が確認されている（第一図）。旧石器時代の存続時間は少なくとも二万年におよぶことから、ひとつの遺跡に幾時期もの旧石器時代の石器群が層をなして発見されることも多い。それぞれの石器群が出土した地層を「文化層」という概念で呼ぶことがあるが、宮崎ではこれが六二三層以上に達する（日本旧石器学会二〇一〇）。

こうした資料の蓄積に、東九州自動車道建設に伴って実施され



第1図 宮崎県における旧石器時代遺跡の分布
（日本旧石器学会 2010 を改変）

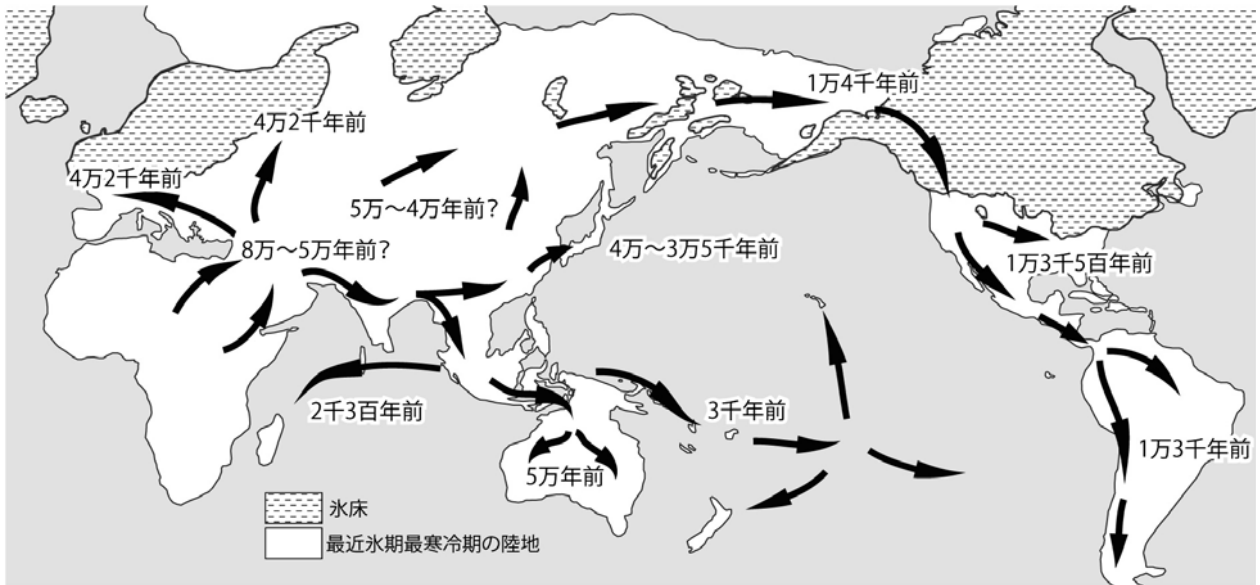
た発掘調査が果たした役割は大きい。全長一三六キロメートルにわたり宮崎県域を南北に走る建設計画にもなつて、一九九五～二〇一三年までに九〇箇所ほどの旧石器時代遺跡が発見される結果となつた。宮崎の旧石器時代遺跡全体のじつに四割程度が、高速道路建設を契機として追加されたことになる。さらに、宮崎県内の各市町村教育委員会や大学による発掘調査もあわせると、最近の二〇年間で、この時代に関する情報は飛躍的に増加したといつてよい。

ここでは、東九州自動車道建設に伴う発掘調査で明らかとなつた成果・知見を中心に、宮崎の旧石器時代研究の現状を紹介し、その時代に生きた人々の実像に迫る手立てとしたい。

二 アフリカから宮崎へ

現代の宮崎に暮らす私たちのルーツは究極的には、どこに求められるのだろうか。背筋を伸ばし、二本脚で歩く霊長類の出現を契機に人類の歴史が始まったと定義すれば、それはおよそ七〇〇万年前のアフリカにいきつく。遠い彼の地で産声をあげたサヘラントロプス・チャデンシスから、気の遠くなるような長い道程を経て、やがてホモ・サピエンスへと進化した人類が、現在「宮崎」と呼ばれる土地に辿りつくまでには、どのような物語があつたのだろうか。昨今の人類史研究の分野では、少なくともそのあらすじが判明するまでに進展があつた。それをもとにすれば、次のようなシナリオを描くことができる（ロバーツ二〇一二、海部二〇〇五）。

およそ二五～二〇万年前のアフリカで、原人から旧人を経て新人へと進化した集団がいた。現生人類であるホモ・サピエンスの登場である。彼らはその揺籃期をアフリカ大陸で過ごしたのち、一三～一〇万年前ごろに、最初の出アフリカを試みたらしい。その痕跡が、



第2図 グレート・ジャーニー（ホモ・サピエンスによる第二次「出アフリカ」）の軌跡
（海部 2005 をもとに作成）

現在のイスラエルにあるスフルとカフゼーという二つの洞窟遺跡から発見されている。しかし、この人類集団は長く存続することはなく、その先に広がるユーラシア大陸への移住には至らなかった。私たちの遠い祖先が、地球上のありとあらゆる土地へと進出するのは、およそ八〜五万年前まで待たねばならなかった。二度目の出アフリカを果たし、グレート・ジャーニーとも呼ばれる拡散過程に入った現生人類は、ユーラシア大陸に先住した旧人たちと出会い、オーストラリア大陸に到達す

る過程では、原人やその末裔（ホモ・フローレンシエンス）とも邂逅したらしい。そして、およそ四万〜三万五千年前に、ついに日本列島に辿りついたのである（第二図）。

三 ホモ・サピエンス到達以前の宮崎

現生人類のその後の物語を続けるまえに、少し立ち止まって考えるべき問題がひとつある。現生人類がユーラシアの東端に足を踏み入れたとき、そこは太古の動物たちの楽園だったのだろうか？ それともすでに先住する他の人類がいたのだろうか？

近年の形質人類学や分子人類学の成果はめざましく、まさしく日進月歩の感がある。古くから論争のあったネアンデルタール人の分類学上の位置づけについても、「ホモ・サピエンス・ネアンデルタールレンシス」として、ホモ・サピエンスの下位分類と捉える説が提出されたかと思えば、やはり私たちとは別種としてサピエンス（ラテン語で「賢い」の意味）の語をとり除かれ、「ホモ・ネアンデルタールレンシス」に戻されるなど、評価が二転三転している。二〇〇九年にBBCで放送され、書籍化もされた『Incredible Human Journey』「人類二〇万年 遙かなる旅路」（ロバート・ニール）では、DNA解析の結果からも彼らと私たちとの間に血の交換はなかったとの見方を紹介していた。その大きな根拠は、ドイツのマックス・プランク進化人類学研究所のスバンテ・ペーボらによるネアンデルタール人の化石から抽出したミトコンドリアDNAの解析結果にあった。一九九〇年代後半以降の研究では、新人と旧人の間に交配があった証拠は見出されなかったのだ。

ところがごく最近になって、再び風向きが変わった。二〇一〇年に発表されたペーボらの研究では、クロアチアで出土したネアンデ

ルタール人の化石のDNA解析から、私たち現生人類の一部にネアンデルタール人に由来するゲノムが含まれていることが明らかにされたのだ。アフリカ人の遺伝子配列にはこのゲノムが認められないため、ペーボらは両者が中東で共存した八万〜五万年前頃に交配があった可能性を示唆している。さらに驚くべきことに、シベリアのデニソワ洞窟で発見された約四万年前の人類に残留したミトコンドリアDNAの解析から、この人類集団（デニソワ人）に由来するゲノムが、メラネシアやオーストラリアなどの地域の現生人類に受け継がれていることが明らかとなった（ハマリーニ〇二二）。すなわち数年前の人類学的常識をくつがえし、私たちの祖先は過去数万年前まで、他の人類種と生息環境を共有し、かつ交配する機会もときには持ったことが明らかとなったのである。

こうした旧人との交配の証拠は、これまでのところに日本人を含む東アジア地域の現生人類の遺伝子配列からは見つかっていない。また日本列島では四万年前を遡ることが確実な旧石器時代遺跡の存否については、いまだ評価が定まっていない（堤二〇〇九）。九州でも、大分県早水台遺跡や熊本県大野遺跡群がその候補に挙がっているが、コンセンサスを得るまでには至っていないのが現状だ。

四 宮崎最古の住人は誰だったか？

宮崎県でも、古くは日之影町出羽岩陰や、最近では川南町後牟田遺跡において、後期旧石器時代を遡る可能性がある石器群の存在が指摘されてきた。ここでは、石器群が重層的に出土し、地層中に複数の火山灰が検出された後牟田遺跡の事例を検討しておきたい（後牟田遺跡調査団・川南町教育委員会二〇〇二）。

後牟田遺跡では、現在の地表面から最下層まで十二枚の地層が確

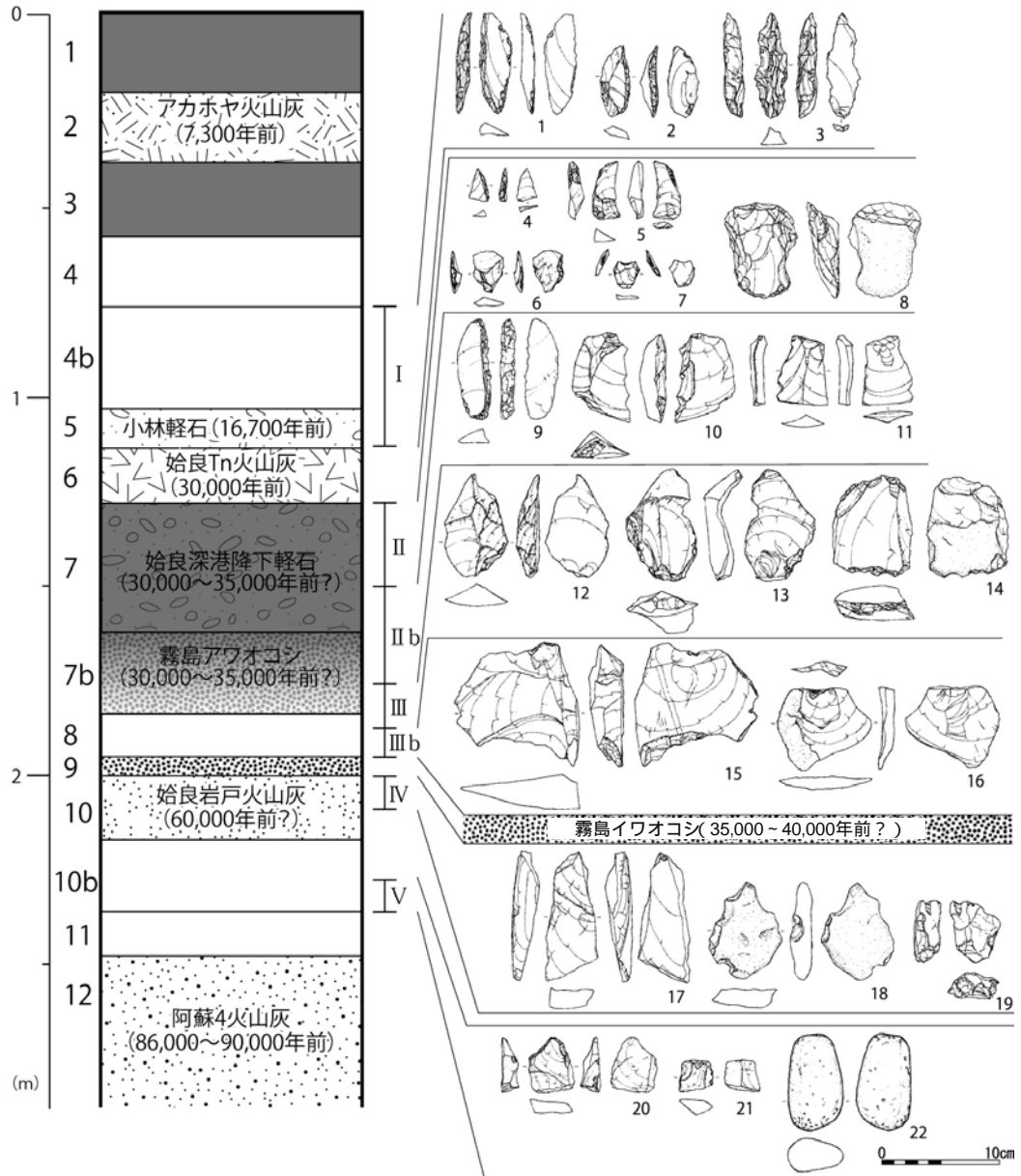
認され、第Ⅰの文化層が設定された（第三図）。このうち、第Ⅱb文化層までは、東九州自動車道建設に伴う他の遺跡の発掘調査からも対比可能な石器群が複数例確認されている。したがって宮崎最古の石器群の候補として追究が必要なのは第Ⅱ文化層の石器群ということになる。両石器群が出土したのは第九層の霧島イワオコシ（No.Ⅱ）の下位であった。

No.Ⅱの降下年代については、自然科学的見地から複数の見解が提出されている。早田勉らが採用した奥野充らの研究では五万年前と古く見積もる（奥野ほか二〇〇〇）。また報告書所収の杉山真二による植物珪酸体分析では、No.Ⅱ前後の地層がその後と比較して相対的に温暖な気候を示すことから、酸素同位体ステージ3に比定し、その年代を四万年前に近いところと推定する（杉山二〇〇二）。長友恒人らによるルミネッセンス法によるテフラの年代測定では、他遺跡の測定事例も含めて、およそ三万七千〜三万五千年前の年代値を提示する（長友ほか二〇〇二）。いっぽうNo.Ⅱ下位にあたる第一〇層上部検出の炭化物を試料とした放射性炭素年代測定では三〇二九〇±二〇〇BPの結果が出た。これをオンラインで利用可能な較正曲線であるCalPal-2007Huluを用いて較正すると、三三四四五±一六九calBPの結果が得られる。すなわち約三万五千年前ということになる。ただしこの試料について、報告者のひとりである佐藤宏之は第八層上面の第Ⅱ文化層の所産である可能性について指摘している（佐藤二〇〇二）。

こうして複数の方法から求められたNo.Ⅱの推定年代値を並べてみると、およそ四万〜三万五千年前にほとんどが収まることがわかる。奥野らの五万年前という推定は、他と比較して古すぎる感がある。No.Ⅱの年代に関してこのような理解が適切だとすれば、少なくとも第Ⅱ文化層の石器群を残したのは現生人類と考えて年代的に矛盾はない。佐藤は、第Ⅱ文化層の年代を四万五千〜四万年前と考

え、第 文化層を阿蘇四火山灰の年代を考慮して八万九千〜四万年
前と位置づけている（佐藤前掲）。第 文化層についてはおおむね
適当な評価であり、第 文化層に關してもその最新値は許容できる
評価といえよう。

資料を实見する機会を持った。その結果、第 文化層の一部の資料
（第三図一七の「折断剥片」）については人工品と捉えられるが、他
の尾鈴山酸性岩類製の「礫塊石器」や軟質砂岩製の「剥片石器」な
ど（第三図一八〜二二）、第 文化層の資料の大半は、即座に



第3図 川南町後牟田遺跡の基本層序と出土した考古資料
（後牟田遺跡調査団・川南町教育委員会 2002 をもとに作成）

さらに検討を進めて、第 石器群を構成する石器自体の評価についても触れねばならない（第三図一七〜二二）。仮に第 文化層の資料を積極的に人工品と評価し、帰属年代を四万五千〜四万年前と位置づけるとすれば、候補となる製作者は二つ考えられる。ひとつめは、第 文化層の年代を古くとも四万五千年以降と位置づけて、ホモ・サピエンスの宮崎への到達を一万〜五千年ほど古く見積もる案である。いまひとつは、第 文化層石器群の年代をより古く見積もることも含め、ホモ・サピエンスに先行して宮崎に到達していた人類の所産と考える案である。後者の見解については、中国および朝鮮半島まで原人ないし旧人によって製作された可能性が高い前期・中期旧石器時代の石器群が確認されていることを考慮すれば、今後日本列島でも同時期の類例が発見される可能性がないわけではない。とすれば、現生人類であれ、旧人以前の人類であれ、後牟田遺跡の L_1 下位の資料こそが、宮崎最古の住人の手によるものとの評価が可能なのだろうか。



写真1 宮崎最古の住人たちが携えた石器
延岡市山田遺跡ほか出土の礫器・部分磨製石斧
(宮崎県埋蔵文化財センター 2013 から転載)

人工品と断定できる根拠に乏しいとの見解に至った。すなわち、第b文化層以降との断絶が著しいのである。これらの、いわばグレイゾーンに含まれる資料群のうち、「礫塊石器」とされる資料については、一部の面にのみ磨耗が激しい部分が観察されるなど、無視できない観察所見も得ているが、いずれ第・b文化層の石器群との比較作業も含めて、再検討する機会を持ちたい。ここで後牟田遺跡における第・文化層の資料を肯定的に評価し、宮崎最古の住人の所産と考えることは、現段階では差し控えたい。

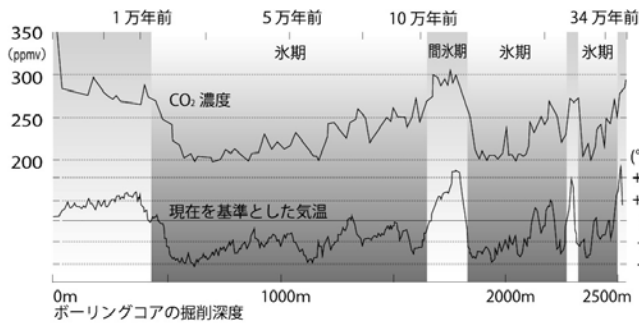
石器群の特徴からしても、推定される年代からしても、その技術的特徴を中期旧石器時代的と捉えるか、後期旧石器時代的と捉えるかは別にして、第・b文化層の石器群はホモ・サピエンスが作った石器だと考えて差し支えないだろう。そしてこれと同時に期の石器群は、宮崎県内でも複数が確認されている。したがって、確実な人工品から構成される宮崎最古の石器群と評価できるのは、いまのところスティーヴンが降下した四万〜三万五千年前以降に現生人類が残した

ものである可能性が高い(写真一)。

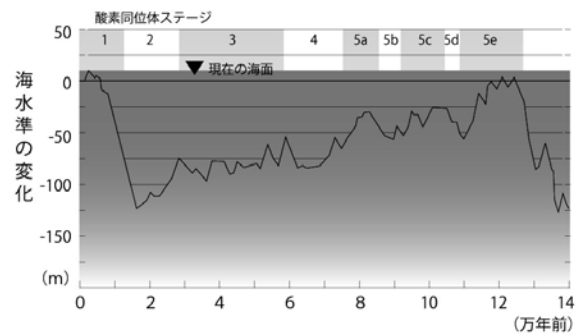
五 旧石器時代の気候と動・植物

これまでの検討で、四万〜三万五千年前ごろに、ホモ・サピエンスの一団が列島にたどり着いたとき、同じホモ属の先住集団がいた可能性はきわめて低いか、あるいははつきりとした証拠を残すほどの人口が定着しなかった可能性が浮かんできた。

人類未到の大地だった宮崎に、最初に足跡を残した現生人類は、いったいどのような気候を体験し、そしてどのような風景を眼にしたのだろうか？ ホモ・サピエンスが日本列島に到達した後期旧石器時代以降だけを考えても、その存続期間は二万〜二万五千年におよぶ。そのあいだ地球の気候も大きく変動した(第四図)。旧石器時代は別名「氷河時代」とも呼ばれ、終始雪と氷に閉ざされた世界を思い浮かべるひとも多いかもしれない。しかし、約二万八千〜二万四千年前の最寒冷期(酸素同位体ステージ二)であっても、冷涼ではあるが乾燥した気候のため、積雪量は少なかったと推定されている。いっぽう、現生人類が宮崎に暮らし始めたと考えられる四万〜三万五千年前ごろは、酸素同位体ステージ三の亜間氷期にあり、相対的な温暖期とされ、冷涼かつ湿潤な気候のため、積雪量が比較的多い気候であったと考えられる。この相対的な温暖期から最寒冷期に向かう気候寒冷化は、おもに植物の花粉分析および珪酸体分析から推定されたものである。ステージ三では、スギ属とブナ属・コナラ亜属などの落葉広葉樹が優勢な植生が一般にみられ、植物珪酸体分析によれば、宮崎を含む九州東南部ではメダケの検出率が高く、種子島周辺では照葉樹林の痕跡も見出される。ステージ二の最寒冷期にはチヨウセンゴヨウやトウヒなどの針葉樹とコナラ属



過去34万年間の気候変動



過去 14 万年間の海面変化

近年の調査から後期旧石器時代後半にあたる3万～1万年前までは、きわめて寒冷な気候だったことがわかってきた。

また、現在の二酸化炭素は過去に例がないほど上昇していることがわかる。

2万年前ごろには、100m以上の海面低下が起こった。

第4図 旧石器時代の気候変動
(宮崎県埋蔵文化財センター 2013 から改変)

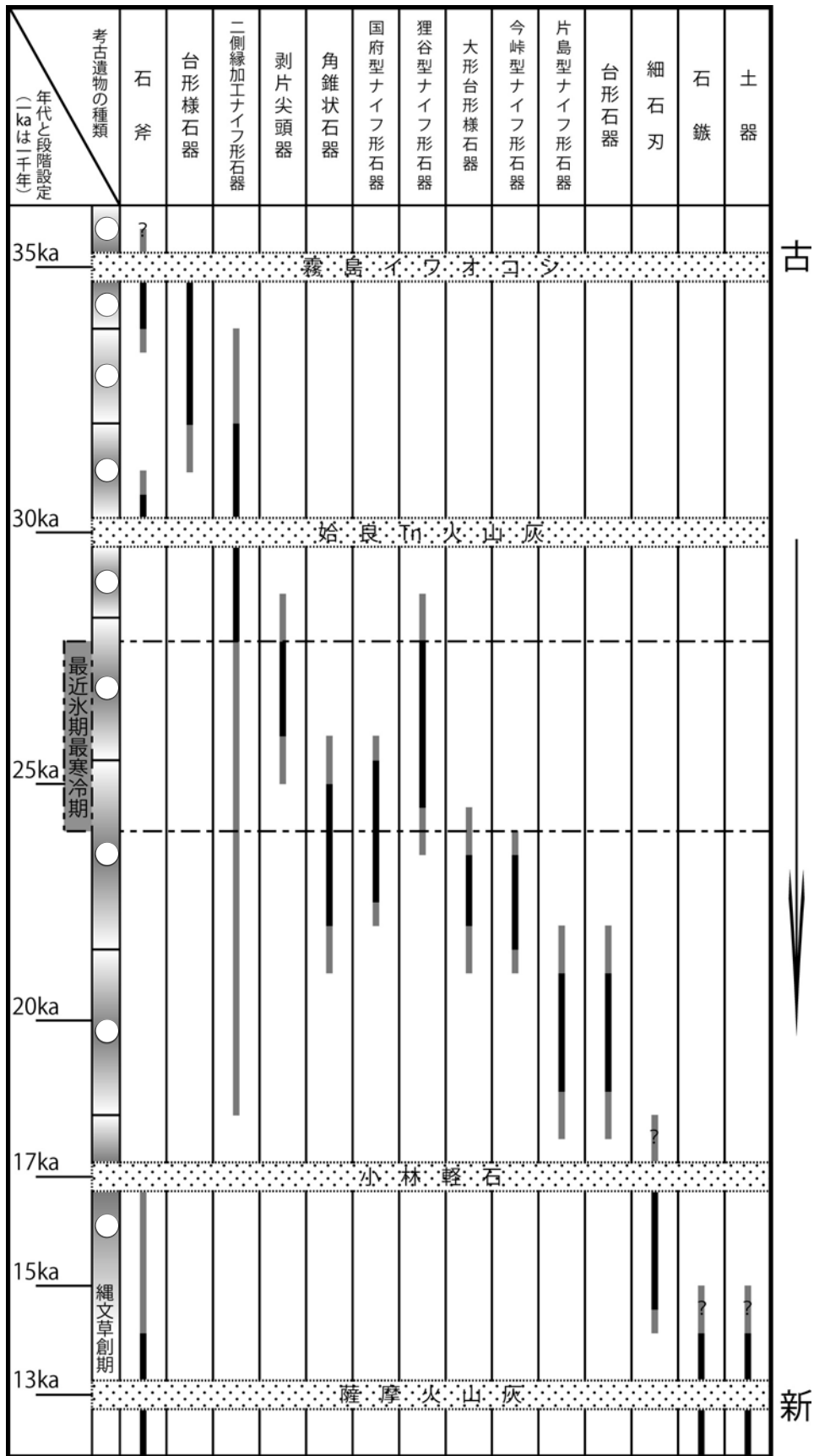
などの落葉広葉樹が混在する温帯針・広混交林が広がり、内陸の台地には草原植生が分布したことも想定されている。また、九州南部の海岸沿いにはシイ属やカシ属などの照葉樹林も分布していた(杉山二〇一〇)。

私たちの祖先が獲物として狙ったであろう動物については、どのようなことがわかっていいるのだろうか? 河村善也によれば、ステージ三には、現在では絶滅して列島には生息していないナウマンゾウやヒョウ、ヘラジカ、バイソンなどがいた証拠がある(河村二〇一〇)が、残念ながら宮崎ではステージ三二にかけての動

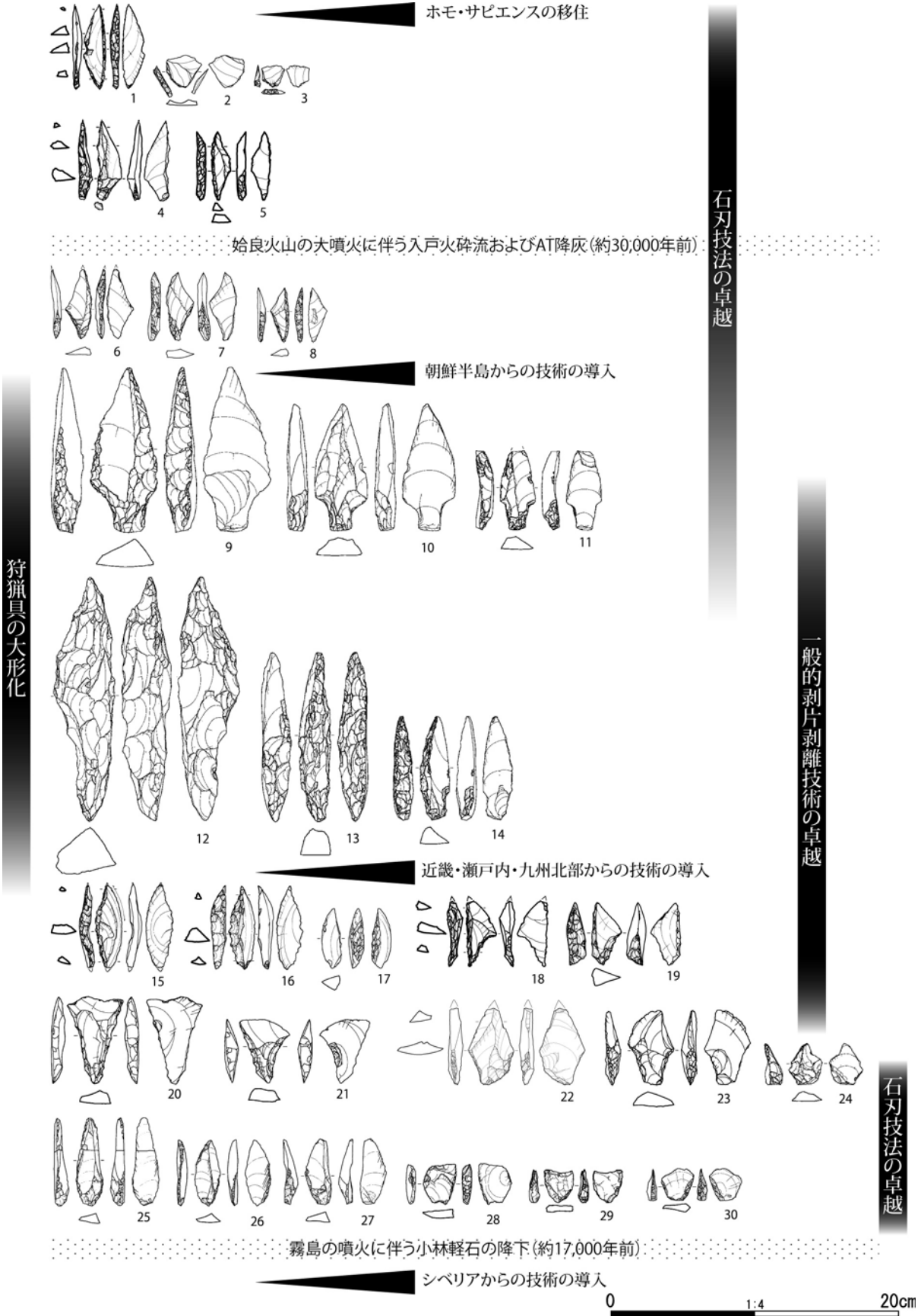
物相ははっきり分かっていない。これより古いステージ四、五の頃に生息したと推定されるナウマンゾウやニホンムカシジカの化石が西都市やえびの市から見つかっているのみである。なお、ゾウやヒョウなどの大形肉食獣は、列島にホモ・サピエンスが定着して以降、絶滅してしまったが、こうした大形哺乳類の絶滅現象は、オーストラリアでもアメリカでもやや時間差を持って共通して見出される。ポール・マーティンはこの現象を人類による過剰な大形哺乳類狩猟に起因すると考え、Overkill model (過剰狩猟モデル) もしくは Blitzkrieg model (電撃戦モデル) を提案した。大形哺乳類の絶滅の要因としては、他に人類の関与を小さく見積もる気候変動モデルがあり、生息環境の変化に伴い絶滅したとの見方をとる。しかし、生態系に占める頂点捕食者の重大な影響をめぐる昨今の議論(ソウルゼンバーク二〇一四)を参照すると、電撃戦モデルもあながち荒唐無稽な説ではないように思える。ソウルゼンバークが挙げる例では、たとえば六年間に四万匹のラッコが姿を消すには、わずか三七頭のシャチが同じ環境にいただけで事足りるのだという。仮に先行して移住した人類が列島にいなかったとすれば、列島に到達した現生人類が見たのはまさしく野生の王国であったにちがいない。そこで、競合して獲物を奪い合う頂点捕食者同士の生存競争があり、しだいに人口を増やし、生息域をひろげた人類が勝利した可能性も考えられるかもしれない。

六 石器のかたちとその移り変わり

相対的な温暖期から人類史上もっとも厳しい最寒冷期を乗り越え、縄文時代を迎えるまでの長い間、宮崎の旧石器時代社会はどのような変遷を遂げたのであろうか。列島の土壌は有機質の残存を許さな



第5図 宮崎県域の旧石器時代～縄文時代草創期における主要遺物の消長



第6図 旧石器時代の宮崎における主な狩猟具の種類とその出現時期
 1～5・15・16・18・19・25～27：野首第2遺跡、6～8：春日地区遺跡第2地点、9～14・17・24・28～29：前ノ田村上第2遺跡、20・21：赤木遺跡第8地点、22：矢野原遺跡、23：北牛牧第5遺跡

い酸性であるため、その証拠は、まずは石器の特徴やその残され方などから探ることになる。

東九州自動車道の西都～清武間はちょうど宮崎平野の中心付近を通るルートで、「原（はる）」と呼ばれる台地状の地形に残された遺跡が多く見つかった。これらの遺跡では、幾枚かの火山灰降灰層準に挟まれた複数の地層に分かれて旧石器時代の遺構・遺物が確認されている。これらの石器を、出土した地層とその形態的特徴に基づいて区分すると、数単位の石器群としてまとめることができる。以前に筆者らが提示した変遷案（宮崎県旧石器文化談話会二〇〇五）では、一〇単位の石器群に細分したが、以来一〇年近い年月が経っており、新たな資料の蓄積も著しく、根本的に見直す時期に来ている。本格的な編年案の構築は今後の宿題としておくが、ここでは仮に八つの段階（松本二〇一四）を設定して、その変遷を追ってみよう。

A T下位黒色帯最下部から、その下の褐色系土層にかけて検出される石器群。

A T下位黒色帯の中部から上部にかけて検出される石器群。

A T下位黒色帯最上部から検出される石器群。

A T直上から検出される石器群。

剥片尖頭器を含む石器群の盛行期。

角錐状石器を含む石器群の盛行期。

ナイフ形石器を組成する石器群の終末期。

細石刃を伴う石器群。

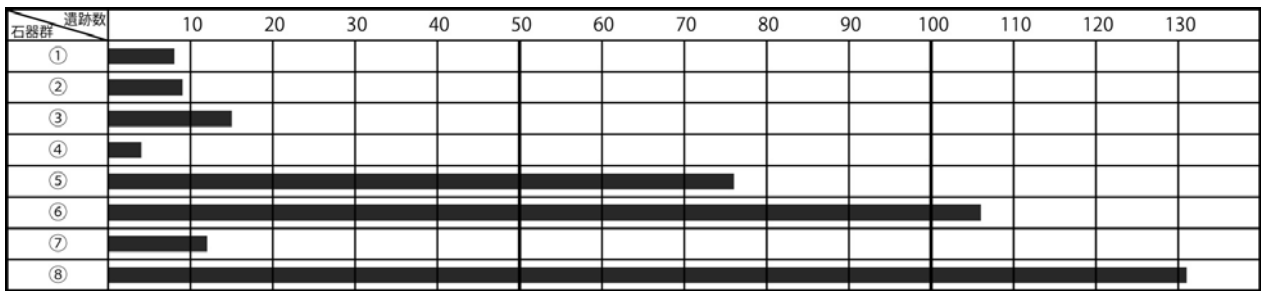
右に示した諸段階は、前半は出土層位に基づき、後半は特徴的な器種の組成を重視することから、統一的な基準で設定されたものではない。これはむしろ理想的な編年段階設定の手法とはいえないが、その理由は、A T上位における百花繚乱ともいふべき石器形態の多様性に主に起因している。A T下位のく およびA T直上のに至るまでは、石器群の変遷は単線的で、器種組成も単純である。と

ころが日本史上最初でしかも未曾有の大災害であるA T降灰の後しばらくすると、それまでにはなかった大形の尖頭器類が出現し、中小形器種もバラエティーに富んで、にわかに複線的な石器群の変遷が見出されるようになるのである（第五・六図）。第五図に示したのはあくまでも、現時点での概念図であるが、各段階の存続期間がA T下位では平均して二千年程度であるのに対し、A T上位では平均して三千年以上になる。A T降灰直後と考えられるの石器群がごくわずかしかみつかっていないことや、片島型ナイフ形石器や小形台形石器を含むの石器群も、や に比べ遺跡数が少ないことを考慮すると、の石器群はそれぞれ三千年以上継続した可能性さえある。しかし、特にのメルクマールとした角錐状石器に時間的に併行する器種が多いことを考え合わせると、いくらかまだ細分の余地はあるのかもしれない。

以下ではくの石器群について、段階を追って特徴的な石器の出現を中心に簡潔に変遷を述べる。

段階 に該当する遺跡としては、延岡市矢野原遺跡第 文化層、延岡市山田遺跡第 期、川南町後牟田遺跡第 ・ b文化層などが代表として挙げられる。

器種構成上の特徴としては、石斧と台形様石器の存在が特筆される。石斧は全体ではなく、刃の部分を中心に研磨しているものが多い。これら二つの器種は全国的にもこの時期に特徴的に認められるものであり、ホモ・サピエンスが列島に定着し始めて間もない頃に共通した必需品だったのであろう。その他に地域性をあらわす可能性のある遺物として、山田遺跡や東畦原第一遺跡第 文化層の礫器類や、後牟田遺跡、新富町東畦原第二遺跡などで確認されている鋸歯縁石器類などが注目される。また鹿児島県域の指宿市西多羅ヶ迫遺跡で出土した礫塊石器類ほど定型化していないものの、後牟田遺跡では第 文化層の尾鈴山酸性岩類製の礫塊石器について、植



第7図 宮崎県域における旧石器時代遺跡数の増減

物加工に用いられた可能性が指摘されている（中村ほか二〇〇二）。

なお、石刃技法について明確な資料は少ないが、矢野原第 文化層では石刃が確認されているため、この段階に少なくとも県北では石刃技法が受容された可能性が高い。

石刃技法の要素は、段階 にいたって少しづつ明らかとなるが、この段階の石器群は確認事例が多くない。該当する遺跡として高鍋町野首第二遺跡第 期、後牟田遺跡第 b 文化層、宮崎市高岡町高野原遺跡第五地点第 文化層などが挙げられる。事例は少ないものの、器種構成としては石刃技法ないしそれに類する縦長剥片剥離技術による素材を用いた二側縁加工のナイフ形石器が登場し、台形様石器も継続して製作される。石斧の製作は途絶える。

段階 では、小形の二側縁加工ナイフ形石器が主流となる。野首第二遺跡第 期や後牟田遺跡第 文化層では、石斧も確認されているが、いまのところ稀な事例にとどまる。宮崎市高岡町永迫第一遺跡、新富町東畦原第三遺跡などが挙げられる。

およそ三万年前の始良火山の大噴火を挟み、段階 ではサイズがやや大きい傾

向にあるものの、二側縁加工ナイフ形石器と搔器を中心とする器種構成は段階 と共通する。遺跡数が少ないため、存続期間も短い可能性がある（藤木二〇一 一など）。宮崎市高岡町朧畔遺跡、新富町春日地区遺跡第二地点などが挙げられる。

段階 ・ では剥片尖頭器、角錐状石器をはじめとして、その他にも多様な種類の石器が製作されるようになる。遺跡数も増加し、特に角錐状石器を伴う遺跡は一〇〇箇所を超える（第七図）。代表的な遺跡として延岡市矢野原遺跡第 文化層、延岡市山田遺跡第 期、川南町前ノ田村上第二遺跡一・二期などが挙げられる。

段階 にいたると、小口型石刃技法から生産される石刃を素材とした基部加工ナイフ形石器や小形の台形石器類が主体となる。層位的出土例はないものの、両者には編年差がある可能性も指摘できる。川南町前ノ田村上第二遺跡三期、高鍋町野首第二遺跡第 期などが挙げられる。

以上の変遷について、石器の大きさ、石器の種類、石器製作の技術からもまとめおきたい（第六図）。

まず、石器の大きさに着目すると、段階 ・ を除き、通時的に五〜六センチ以下の長さに収まる狩猟具が優勢であることがわかる。すなわち、段階 ・ にみられる剥片尖頭器や角錐状石器のサイズの大型化は、長い時間軸に置くと例外的な現象なのである。いつばう従来から指摘されていることだが、段階 と段階 には石器の小形化も確認される。

次に器種の変化を追うと、まず段階 における石斧と礫器の存在が注目される。時を経て段階 ・ 縄文時代草創期にいたり、再び石斧が製作される。また、段階 以降、段階 にいたるまで、搔器が安定的に組成されることも注目される。

石器の製作技術という観点からは、石刃技法のあり方に注意しておく必要がある。石刃技法は段階 以降、徐々に顕在化し、段階

では主体的な技術となる。段階の剥片尖頭器にも用いられるが、段階では低調となり、段階で再び用いられる。石刃技法が目立たない段階では、一般的剥片剥離技術から生産された剥片を素材として角錐状石器や今峠型ナイフ形石器、大形台形様石器などが製作されるほか、他地域から伝播した瀬戸内技法による国府型ナイフ形石器の製作も活発になる。外来からの伝播と考えられる技術としては、三つの画期が確認される。すなわち、段階における朝鮮半島からの剥片尖頭器の伝播、さきほど触れた段階における近畿・瀬戸内・北部九州からの瀬戸内技法の伝播、段階におけるシベリアからの細石刃石器群の伝播である。

七 遺跡を残した人びとの暮らし

これまでに述べてきたような遺跡や遺物の変遷は、いったい当時の人びとの生活をどのように反映しているのだろうか？

まず石器のかたちが時代が進むにつれ変化したのは単線的な社会の進化、発達段階を示すわけではないことに注意が必要である。たとえば、石斧は列島への最初の移住者たちが携えていた道具であったが、その後ほとんど作られることはなくなり、旧石器時代が終わりを迎えるところに再び盛んに製作されるようになる。石斧は必要とされる機会があれば作られたし、そうでなければそれを作るための技術は備えていても作られることはなかった。程度の差こそあるが、旧石器時代の石器は、そういう側面を持っているように思われる。第五・六図には示していないが、皮なめしの道具とも推定される掻器が増え、礫群（焼石の集まった遺構）が目立つのは、段階以降段階あたりまでにその傾向が顕著である。こうした現象は、このころに深まった気候の寒冷化への対処である可能性が高い。

旧石器時代の人びとは、一定の領域を遊動する狩猟採集民であったと考えられ、彼らが残した石器の多くは、周囲の自然環境への適応の結果だと理解できる。第六図に示した多様な石器のかたちの違いのそれぞれに対応する意味を見出すことは、いまのところ困難な課題だが、時間軸上の遺跡数の増減と組み合わせると、大きな流れはつかめるかもしれない。

パイオニアとなった宮崎最古の住人たちは、本格的な寒冷期を迎えるまでの間、石斧を手に周囲の自然に働きかけた。その活動が、樹木の伐採であったのか、ナウマンゾウの解体であったのか、皮なめしであったのかははっきりしない。またときには礫器を必要とする活動もあった。沖縄の出土人骨などが示唆するように、この集団が南方起源であったとすれば、この段階では石刃技法をその技術的レパートリーに持っていなかったかもしれない。

しかし次第に厳しさを増す寒冷期が訪れ、彼らは石材を効率的に消費する石刃技法を採用し、それはその後も継続して用いられる。三万年前には始良火山の大噴火により、南九州の地形は一変したが、被災地域の周辺ではほとんどなく狩猟採集生活が再開されたい。これに連動するかのよう訪れた最寒冷期には、朝鮮半島で使われていた剥片尖頭器が、九州にもたらされ宮崎でもさかんに作られた。続いて登場した角錐状石器とともに、段階・ではそれまでにいく狩猟具が大形化した。またこの時期、遺跡数も大幅に増加している。狩猟具の大形化が直接的にはどのような理由に拠るものなのかは定かではないが、遺跡数が増加したのは人口の増加ではなく、移動回数の増加に起因するものと思われる（松本二〇一四）。つまり、頻繁に移動することで、石器製作やメンテナンスの機会が増え、遺跡として残される活動地点が増加したという解釈である。この移動パターンの変化が、最寒冷期の環境と関連している可能性は高く、積雪量の減少や拡がった草原植生への適応の一環だったとも考えら

れる。さまざまなかたちの狩猟具や、国府型ナイフ形石器に代表される他地域からの人の移動を伴う技術導入なども、適応の一表現形態として理解されよう。また、最寒冷期を過ぎ、相対的な温暖化の過程で、宮崎にも細石刃石器群がもたらされたのは、ホモ・サピエンスによるその後のアメリカ大陸進出と無関係な動きではなかったであろう。

自然環境の変化に、石刃技法と一般的な剥片剥離技術を使い分け必要とあらば磨製技術も駆使して対応していた宮崎の旧石器人の生活だったが、そこには大きな画期が二度、小さな画期は三度あったといえるかもしれない。大画期の一度めはもちろんグレート・ジャニーを経た宮崎への移住、二度目は地球規模の最寒冷期が起こり、それまでの生活スタイルを大きく変化させた時期である。三度の小画期とは始良火山の大噴火、二度目の大画期に伴う朝鮮半島からの剥片尖頭器の導入、シベリアからの細石刃石器群の到来である。第一の小画期は南九州レベル、第二の小画期は朝鮮半島と九州を包括した地域レベル、第三の小画期はグレート・ジャニーの完遂に連動した地球規模のものだったと評価できる。

ややもすれば毛皮をまとい極寒の生活に耐えて洞窟で暮らすイメージに終始する旧石器時代だが、そこに暮らした人々が残した石器には、気候変動や環境の変化に伴い、世界規模のホモ・サピエンスの動静にも対応したダイナミックな歴史が刻まれている。

参考文献

アリス・ロバーツ（馬場悠男監訳）二〇二二『人類の進化大図鑑』、河出書房新社
アリス・ロバーツ（野中香方子訳）二〇二三『人類二〇万年遙かなる旅路』、文藝春秋
ウィリアム・ソウルゼンバーク（野中香方子訳）二〇一四『捕食者なき世界』、文

後牟田遺跡調査団・川南町教育委員会 編 二〇〇二『後牟田遺跡 宮崎県川南町

後牟田遺跡における旧石器時代の研究』

奥野 充・福島大輔・小林哲夫 二〇〇〇『南九州のテフロクロノロジー 最近

一〇万年間のテフラ』、人類史研究 第二号、人類史研究会

海部陽介 二〇〇五『人類がたどってきた道』、NHKブックス

河村義也 二〇一〇『更新世の哺乳類』、講座日本の考古学 旧石器時代 上、青木

書店

佐藤宏之 二〇〇二『後牟田遺跡第 文化層の編年的意義と行動論』、後牟田遺跡

宮崎県川南町後牟田遺跡における旧石器時代の研究』

杉山真二 二〇〇二『後牟田遺跡における植物珪酸体分析』、後牟田遺跡 宮崎県川

南町後牟田遺跡における旧石器時代の研究』

杉山真二 二〇一〇『更新世の植生と環境』、講座日本の考古学 旧石器時代 上、

青木書店

堤 隆 二〇〇九『ビジュアル版 旧石器時代ガイドブック』、新泉社

中村真理・藤本正和・佐藤万里江 二〇〇二『後牟田遺跡第 文化層の礫塊石器類

と遺跡空間の構成』、後牟田遺跡 宮崎県川南町後牟田遺跡における旧石器時代

の研究』

長友恒人・森 文幸 二〇〇二『ルミネッセンス法によるテフラの年代測定』、後牟

田遺跡 宮崎県川南町後牟田遺跡における旧石器時代の研究』

日本旧石器学会 二〇一〇『日本列島の旧石器時代遺跡 日本旧石器（先石器・岩宿）

時代遺跡のデータベース』

藤木 聡 二〇一〇『入戸火砕流による大災害と片田段階の歴史的特質』、九州旧石

器 第一四号、九州旧石器文化研究会

マイケル・F・ハマー（篠田謙一監修・千葉啓恵訳）二〇一三『混血で勝ち残った

人類』、別冊日経サイエンス 化石とゲノムで探る人類の起源と拡散、日経サイ

エンス社

松本 茂 二〇一〇『南九州東部・東九州南部における重層遺跡からみた石器群の

変遷』、九州旧石器 第一四号、九州旧石器文化研究会

松本 茂 二〇一四『九州地方における旧石器時代石器群と遺跡群について』、九州

旧石器 第一八号、九州旧石器文化研究会

宮崎県旧石器文化談話会 二〇〇五『宮崎県下の旧石器時代概観』、旧石器考古学 第

第六号、旧石器文化談話会

宮崎県埋蔵文化財センター 二〇一三『みやざき発掘一〇〇年 いにしへの「道」と交流』

現代文学の中の『古事記』

谷川雁、中上健次、上橋菜穂子

宮崎公立大学

渡邊 英理

目次

- 1、『古事記』を変奏する文学 ファンタジー作家／児童文学者、上橋菜穂子
- 2、熊野で読む『古事記』1 谷川雁
- 3、熊野で読む『古事記』2 中上健次
- 4、隼人たち
- 5、うら若い語り部と「神の嫁」
- 6、ファンタジー 現実を異化するための言葉

1、『古事記』を変奏する文学 ファンタジー作家/児童文学者、上橋菜穂子

日本初の本格的な歴史書であり、日本列島の神話世界を代表する『古事記』。その『古事記』をめくって、今日に至るまで、数多くの研究が積み重ねられ、また、それが、絵画や漫画、映画や文学作品など、さまざまなジャンルに、引用され、翻案されてきた。すなわち、研究者、批評家はもとより、『古事記』は、さまざまな創作の源となり、多くの作家、芸術家に靈感を与え続けてきたのである。

その意味で、『古事記』は、単に過去の文学としてあるのではなく、わたしたちの「いま・ここ」に遍在し、現在も、生き続けている。そして、その姿は、現代文学の中においても変奏され、実に鮮やかな形で所を得ている。

本稿は、そういった現代に生きる『古事記』の姿の一面に迫り、なかでも、上橋菜穂子さんのファンタジー小説『月の森に、カミよ眠れ』という作品を通じて、『古事記』の現在性を明らかにしたいと思う。

上橋菜穂子は、一九六二年、東京生まれ。現在最も人気のあるファンタジー作家/児童文学作家の一人である【註1】。『獣の奏者』『精霊の守り人』など、幅広い読者を獲得した作品の幾つかは、NHKのアニメとして映像化されており【註2】、また、同じNHKにて『精霊の守り人』の実写化の予定も発表されている【註3】。そうした二次作品も含めて、日本国内はもとより、世界中に、上橋菜穂子の愛好者は存在していると言える。二〇一四年の三月、上橋が、『児童文学のノーベル賞』とも言われる国際アンデルセン賞・作家賞を受賞したことは、その人気と実力のひとつの証であろう。

上橋はまた、作家である一方、大学に籍をおく研究者でもある。

専門は文化人類学で、オーストラリアの先住民であるアボリジニの研究に長く携わってきた【註4】。文化人類学は、フィールドワークやインタビュー、参与観察などを用いた、実証性を重んじた学問であるが、同時に、極めて、抽象的/理論的な側面を有する学問領域でもある。「未開」の地域の高度な文化構造を可視化することに成功したレヴィ・ストロースの構造人類学/神話人類学以来の「言語論的転回」の衝撃を受けて以来、文化人類学は、この世界を、実体論としてではなく、言語によって切り取られる差異化の(言語的)網の目として捉えることをも試みようとしてきたのである。こうした実証と理論の両面から、世界の作られ方、創造/想像のされ方に迫る学問領域としてある文化人類学。上橋において、そこで得られた知見は、その創作にも見事に活かされ、それらの知見に裏付けられた精緻に構築された世界観で、上橋作品は特徴づけられる。本稿が対象とする『月の森に、カミよ眠れ』(以下、『月の森に』と略記)も、そうした特徴を有する作品のひとつだと言える。

『月の森に』が出版されたのは、デビュー作『精霊の木』(一九八九年)から二年後の一九九一年のことである。この作品で、上橋は、日本児童文学者協会新人賞を受賞し、「日本的ファンタジー」の書き手として注目を浴びていく。言わば、今日の上橋へと作家が至る、ひとつの画期になった作品が、『月の森に』だと言える。とりわけ論者にとって興味深いのは、この小説が、宮崎で、『古事記』を読むことの本来の意味を提起してやまないという点である。宮崎は、日向神話、天孫降臨縁の地として、『古事記』と浅からぬ関係を持つ地域として自認され、また、『古事記』縁の地として他者からも承認されてきた訳だが、その宮崎で、『古事記』は、いかに、読むべきなのか。別言すれば、その問いは、宮崎に対して古事記が本来的に持つ意味を考える、という課題へ通じている。以下、本稿では、現在の宮崎で、『古事記』を読む方法を提示する企てとして、この

上橋の小説を、読んでみたい。

著者・上橋自身も認めるように、後年の作品に比して、小説『月の森に』には、初期作品ならではの生硬さはある。しかし、それゆえに、上橋自身が後に「若さゆえの圧倒的な熱のよつなものと語るような、鮮烈なモチーフを有している【註5】。そのモチーフとは、隼人を主人公にして描く行為で達成される事柄だと言える。小説『月の森に』のあとがきで、上橋自身は、次のように述べている。

正史にはほとんど登場しない隼人を主人公にしたのは、漁撈や焼き畑、狩猟採集の生活をしてきた人びとが、朝廷への服従を契機に異なる文化を知り、やがて稲作を受け入れ、強制的に国家へ組み入れられていったことで、カミへの意識が変化していったのではないかと思いつき、その変化への葛藤を、三人の巫女に象徴させて描きたいと思ったからです【註6】

隼人を主人公にして書く。実のところ、その行為自体に、『古事記』と対峙する作家の鮮明な態度表明が孕まれている。その態度の中にこそ、宮崎で『古事記』を、いかに読むべきか、という問題提起を汲み取るべきだろう。その問題提起を追跡するにあたって、本稿では、まず、古事記をめぐる他地域での読書行為を参照してみたい。たとえば、熊野 和歌山にて、古事記は、いかに読まれているのか、その実践を、まずは補助線としてみることにしよう。

2、熊野で読む『古事記』 1 谷川雁

熊野で『古事記』を読む。その行為として、まず、参照したいのは、谷川雁である。詩人であり、思想家である谷川雁は、一九二三

年、熊本県の水俣生まれ。東京大学を卒業後、西日本新聞社につとめ、その後、福岡、筑豊の炭鉱に移住し、「サークル運動」の中心を担っていく。時は、「エネルギー革命」の時代。石炭から石油へエネルギーが転換されていく。それに伴い、明治以来、長らく日本経済を支えてきた炭鉱が、閉山へと追い込まれることになる。無数の労働者が餓首され、退職を余儀なくされる。谷川雁は、この労働者とともにあり、「サークル村」、「大正行動隊」など、労働運動／文化運動を実践していった。その実践の最中に、さらには、その後も、少なくとも詩や評論を残した日本の戦後の重要な詩人、思想家である谷川雁をめぐっては、近頃、再評価が進んでいる。

その雁の記した言葉のなかに、「馮依の分裂を知る者 中上文学・二泊三日の旅から」というエッセイがある。『国文学』一九八五年三月号に発表された、このエッセイは、作家の中上健次に誘われて、熊野を訪れた経験をもとに書かれたものである。すなわち、熊野を経巡る、ひとつの旅の記録が、このエッセイであり、同時に、それは、きわめてユニークな熊野論である。すなわち、熊野を経巡る旅の記録であると同時に、熊野をめぐる思念の記録。そして、その根幹には、熊野から読む『古事記』論がおかれている。このエッセイの冒頭を、雁は、ある石について語ることから始めているが、そこから、雁の想像力は、熊野と日向を結びつける。

日暮れちかいた熊野の浜で拾った、ツヤのある黒い小石を、自宅の標本箱でくらべてみた。鉱物なら「試金石」、岩石なら「黒色珪質頁岩」に相似していて、まずこれにちがいはあるまい。標本はどれも和歌山県東牟婁郡宇久井産とある。宇久井は新宮と勝浦の間にある海辺で、そこと勝浦の中間に那智があるから、これはかの「那智黒」の同類ということになる【註7】。

那智黒とは、熊野で採れる黒い石である。平安時代末からの「蟻の熊野詣で」と言われた時代、天皇や上皇、貴族など時の為政者たち、さらには庶民までもが、熊野へ出掛け信心した。特に院政期にはおよそ百年の間に、九十七回も上皇や法皇が熊野に詣でたことが知られている。「蟻の熊野詣で」とは、熊野路が詣でる人々で一杯となる様をさして言う言葉だが、その蝟集した人々が、熊野詣での記念に持ち帰ったと伝えられるのが、この那智黒の石であった。非常に固い石である那智黒は、試金石としても知られている。ここでの試金石とは、文字通り、金を試す石である。金を那智黒にこすりつけることで、その純度は、はかられた。

この那智黒が使われる、いまひとつ有名な用途が、碁石である。黒い碁石は、熊野産の那智黒を素に作られた。対して、白い碁石の原料は、麗しい光沢と端正な縞模様を有する、日向はまぐりに他ならない。日向の特産品のひとつである、あの白い碁石。黒い熊野と白い日向。ここにおいて熊野と日向は、対となる。

このように、熊野と日向が対をなすことは、けして偶然ではない、と雁は考えた。たとえば、宮崎には、東諸県郡（ひがしもろかたぐん）という地名があるが、右の引用部にあるように、和歌山には、東牟婁郡（ひがしむろぐん）という土地がある。両者は、モロとムロとの音で近似する。こうした普通する類似した地名の存在を、熊野と日向の間にある、つながりのひとつの証として、雁は考えた。

ならば、なぜ、熊野と日向は、結ばれるのか。その理由に、雁があげるのが、他でもない『古事記』、とりわけ神武東征の物語だと言える。

神武東征の物語。それは、初代天皇、神武こと神倭伊波礼毘古命カムヤマトイワレヒコノミコトが、日向から東進し、やがて到着した大和の地で天皇位に即位するまでを語る物語である。この時、東を目指す神武が兄とともに船出した港として、宮崎の美々津が伝承

されるが、美々津を出たあとの一行は、当初、浪速国（現在の大阪）から、大和入りを目指した。しかし、そこには、ナガスネヒコの軍勢が待ち構えており、兄、五瀬は、その軍勢の矢にあたつて、負傷し、やがて、旅の途上で死に至る。やむなく、神武らは、浪速を避け、さらに南へと下り、紀国から大和へ向かうことになる。

かくして紀国／熊野から大和を目指す神武一行であったが、しかし、熊野には大熊がいて、その靈気によって、みなが戦う意欲を失い倒れてしまう。そこに現れたのが、熊野の高倉下（タカクラジ）である。熊野の高倉下は、太刀を手に持ち現れた。そして、その太刀を神武へと手渡すや、神武は、意識を回復する。さらに神武が太刀を一振りすると、熊野の荒ぶる大熊が、切り倒されてしまつたのだ。一行の士気も戻り、神武は熊野を奥へ奥へと進んでいく。八咫鳥に導かれ、神武らは、無事、大和へ到着することになるのである。おおよそ、これが、いわゆる『古事記』で語られる、神武東征の物語の粗筋であろう。この中に、谷川雁が見出したのは、『古事記』が熊野に持つであろう本来的な意味である。その意味を、雁は、まさに試金石たる那智黒を例に説明する。

熊野というのは、「稲の国ではない」、農業が主幹産業ではない土地である。実際に、熊野を訪れたものは、ただちに感じるように、紀伊半島は、山が海のすぐそばまで迫っており、ほとんど平地がない。それは、すなわち、稲を育てるよき田がない、という一事を意味している。雁によれば、そのような「稲なき国」、非稲作地帯たる熊野とは、「稲によって立つ国の試金石」に他ならなかった。

試金石／那智黒を有する熊野の地。その石を求めて、「金」持つ国が、熊野に侵入してきたとしても、不思議ではない。ここでの金は、つまり、富と考えてもよい。金持つ国、つまり、稲を作り、富を蓄積した国が、外から熊野にやってきた、そう雁は、考えた。この金持つ国こそ、今日で言うところの大和、すなわち、神武たちで

あろう。神武東征とは、外部者／神武たちが、熊野へ侵入する過程を描く物語に他ならなかった。

物語は、誰が、どの立場で語るのか、という変数によって、その姿を変える。『古事記』の中で、熊野の者は、大熊という人間ならざる者として、邪悪そのものの存在として、その姿を現している。それは、あくまで、神武の側、つまり、天皇の側から見た姿だと言えるだろう。

熊野の「荒ぶる神」とは、誰か。おそらく、それは、もともと、その土地にいた、熊野を本拠地とする土地の豪族たちと推測できる。当時の日本列島で、それぞれの土地に根付き、その土地を治めていたはずの豪族たち。熊野の荒ぶる神とは、そのような豪族のひとつで、当時、熊野を治めていた有力者のひとつであったと考えるべきだろう。

エッセイの中で、雁は、熊野で拾った「那智黒」の石に耳をそばだてる。そして、そこに、「一地方の気質の基調音」としての「響き」を聞こうとする。「那智黒」の「響き」とは、元来、熊野の土地にあった「神武よりスサノオよりも古く、黒い石の特別な音楽」だ、と雁は言う。しかしながら、その音は、「クロガネの高倉下（タカクラジ）の横刀の吸った悪夢」によって無音へと化したのだ。

詩人、谷川雁の本領が発揮された、きわめて詩的な、この表現は、次のようなことを言うのである。熊野には、「神武よりスサノオよりも古く」「一地方の気質」があったとは、もともと、その土地に土着の一族がいた、という一事を指し示している。そして、その「気質」が、「クロガネの高倉下の横刀」をふるった天皇神武によって失われた。すなわち、土着の熊野の一族らの声は、天皇神武によって永遠に奪われてしまったのである。

したがって、熊野の側から見れば、事態は、まったく違ったものとなるだろう。突然、外部から侵入し、富と武力を背景に屈服

を強いる、それが熊野にとっての神武であろう。熊野の荒ぶる神なる、邪悪な化身は、敗れ去っていた者へ勝者が与えた仮象なのだ。

3、熊野で読む『古事記』 2 中上健次

同じことを、雁と同じく、あるいは、それに先駆け考えていた作家がいる。雁を熊野へ誘った、小説家・中上健次である。

中上は、一九四六年、和歌山県新宮市の被差別部落に生まれ、九二年に四六歳で亡くなった熊野出身の作家である。一九七五年小説『岬』で、戦後生まれで、はじめて芥川賞を受賞した作家としても知られているこの作家は、雁と同じ線で神武東征の読み筋を示し、さらには、その中に、被差別部落の起源を見出した。

「紀伊半島、紀州とは、いまひとつの国である気がする。まさに神武以来の敗れ続けてきた間に沈んだ国である」【註8】。「被差別部落が、冷や飯を食わされ続けて来た紀州、紀伊半島の中でも一等半島的情況、紀伊という歪み、特性が積み重なったところでもある」と私は思っている【註9】。「古事記の神武東征の条りに記された神武の軍と熊をトーテムとする部族の戦」【註10】。「被差別部落を訪ねるたびに、私が思い描いた「戦争」とはこの敗れた者らと勝利した者らの戦のことである」【註11】。

侵入してきた神武と戦い、敗れてしまう熊野。その敗れた者たちが、特定の場所に囲い込まれて暮らすようになった場所、それこそが、今日いう被差別部落の起源のひとつと、中上は見た。

外から、圧倒的な力を持った侵略者がやってくる。そのとき、熊野では、いろいろ身の処し方があっただろう。致し方なく抵抗を諦めた人たち、最後まで諦めずに抵抗し続けた人たち、あるいは、仲間を裏切り寝返った人たち。様々な選択をした者たちが、いたと

思われる。実のところ、神武東征の物語には、このとき、様々な選択をした熊野の人々の姿が、複数的に刻印されている。

たとえば、熊野の高倉下（タカクラジ）とは、いかなる選択をした者と考えられるだろうか。地元熊野の者である高倉下（タカクラジ）は、いま、まさに自分たち熊野を倒さんとする神武へ太刀を差し入れる。これは、明らかに熊野に対する、裏切りに類する行為である。太刀を敵に渡す、というのは、神武を助太刀した、つまり、軍事的な加勢をしたとも読めようし、あるいは、神武に熊野の側の弱点や急所を教えるといった、ある種の「スパイ」的行為を伴う、情報提供者としても読むことができる。具体的な軍事的援助者なのか、あるいは、情報提供者なのか、いずれにしても、熊野を離れ神武の側に寝返った者の喩が、高倉下（タカクラジ）だ、と言えるだろう。

同様な視点で、八咫鳥（ヤタガラス）について考えてみよう。八咫鳥とは、熊野から大和の橿原まで、険路を案内したと伝承される、伝説上の大カラスである。『古事記』は、高木大神（タカギノオオカミ）が、八咫鳥に、神武天皇の一行を道案内するように命じたと言っている。

あくまで侵略する側にとつて、侵略の過程で重要なものは、その土地の地形や道を示し、戦略的に重要な土地へと導いてくれる、よき水先案内人を、得ることである。八咫鳥は三本足の鴉だが、それは境界的な存在をさしているだろう。二つの生物が、かけあわされた双成りという存在、首を二つ持つ、あるいは人間と動物の間である、混交的なヤヌス的存在。すなわち、二つの共同体の間にあつて、両方の社会に知悉し、両方の言語に精通する者。そういった、境界的な間にいる、媒介者、通訳者、翻訳者としての存在が、ここでの八咫鳥だと言える。神武を熊野の内部に引き入れて、道案内をし、さらに、政治、文化、軍事的に重要な土地を神武の側に教え、定住の地にふさわしい豊かな土地へと道案内をした存在として、八咫鳥を

見ることができよう。

さらに邪推を働かせるならば、八咫鳥の境界的な性質は、神と人との間、人と動物の間、すなわち大和と熊野の間に生まれた「混血」的存在を思わせる。軍事的侵略が、しばしば、性的な侵略を伴うことを思い起こすならば、この八咫鳥という鳥は、性的な侵略「強姦」によつて生み落とされることになった子供たちとも考えられるだろう。こうして二つの文化の間を生きるようになる「混血」的存在が、ここでは、媒介的な通訳者の任を担わされている。

このように、さまざまな立場にあり、選択をした熊野の中で、神武から、最も虐げられ、蔑まれた位置におかれるのは、誰か。それは、おそらく、最後まで抵抗した人たちであろう。神武の傘下に下らず、誇り高く抵抗し続けた者たち。そういった人たちが、仮に、最後まで生き延びたとするならば、捕虜にされ、敗戦後、敗者の中でも最も屈辱的な立場におかれることになるだろう。神武と熊野の戦争においても、最後まで、神武に抵抗し続けた人たちが、少なくとも、いたはずである。そのような人たちは、戦争が終わると、よからぬ存在、問題のある人たちとして、たとえば、「犯罪者」や「国賊」など、不名誉な徴をつけられて集められ、一カ所に囲い込まれて、蔑視されていくことになる。

被差別部落を象る差別する側と差別される側という構造。その構造は、けして、所与のものでもなければ、自然にできたものでもない。その起源には、人為的な力が伴われている。たとえば、外からの侵略があつて、戦争があつて、それによつて、もたらされた勝者と敗者の力関係がつけられ、それが差別／被差別の構造として固定化される。その過程を、中上は、作家ならではの想像力で突止めていった。

このように、敗れた者たちが、現実社会の中で差別を被るのだとするならば、同じことは、物語の中でも生じている。物語の中の差

別、それは、端的に言つて、鬼や、もののけなど、負の表象が付与されるといふ一事である。勝てば官軍という言葉そのままに、物語においても、敗者には、自らを語る言葉は与えられない。雁が言うように、「那智黒」の「響き」＝声や言葉は、「クロガネの高倉下の横刀」をふるった天皇神武によつて永遠に奪われた。勝者の物語の中で、敗れた者たちは、常に、鬼や、もののけといった邪悪な存在へと姿を化し、その姿を醜悪にさらすことのみが許されるばかりなのだ。

4、隼人たち

さて、ここまで、熊野で『古事記』、熊野から読む『古事記』といった視点で、谷川雁と中上健次の『古事記』論を概観してきた。

その際、鍵となるのが、天皇神武と熊野の関係であった。

実のところ、日向にも、この神武と熊野に類する構図がある。ここで注目されるのが、隼人だ。

隼人とは、いわゆる「まつろわぬ民」である。南九州に住み、その勢力をその一帯に有していた一族、隼人。その隼人は、中央の大和朝廷が勢力をのばすにつれて、段階的に、その配下に従属していった。服属した隼人は、警護や軍事、芸能等を司り、天皇の側近として聖なる存在として扱われていたが、同時に、しばしば蔑視され賤視されていた、と言われている。

この隼人の姿が、『古事記』の日向神話にも現れている。

たとえば、「海幸・山幸」の物語の中である。いわゆる「海幸・山幸」の物語の主人公は、日向神話の二代目・ホヨリ（ヒコホホデミ＝山幸）である。山幸ノ弟のホヨリは、海幸ノ兄のホドリに、たまには、仕事を交換してほしいと申し出る。兄に代わって、海へでた山幸。

しかし、そのとき、山幸は、兄の大事な仕事道具である釣針をなくしてしまふ。兄に責められ、弱つた山幸は釣り針を求めて海神の国へとたどりつく。そこで、山幸は、海神の国の王の娘を妻とし、海神の国の王の助けを借りて、見事、なくした釣針を見つけ出す。さらに、山幸は、この海神の国の王から、霊力を持った「潮盈珠（しおみつたま）」と「潮乾珠（しおふるたま）」を貰い、地上へと戻る。その玉の力を借りて、弟の山幸は、兄である海幸彦を屈服させ、終生、忠誠を誓わせる。このように、『古事記』の「海幸・山幸」の物語は、浦島伝説の話形を含みこみながら、その基本は、兄弟争いの物語におかれている。その争いは、兄が敗れて、弟の支配下に下ることによって終止符がうたれることになる。そして、この敗れた兄こそが、『古事記』において、隼人の祖とされる人物なのだ。すでに述べた通り、隼人は、天皇の側近として芸能事を司っていたのだが、その隼人が朝廷に献上する舞の起源は、この時、兄海幸が、弟山幸、すなわち、天皇家に溺れさせられた時の姿にあると『古事記』は言う【註12】。

もうひとつ、『古事記』の中に登場する隼人の例は、コノハナサクヤヒメである。コノハナサクヤヒメは、日向神話の一代目、天孫ニニギの物語に登場する姫である。高千穂に光臨したアマテラスの孫・天孫ニニギ。その天孫光臨の物語の中で、ニニギは、笠沙の岬（宮崎県、鹿児島県に伝説地）で一人のヒメ、コノハナサクヤと出会いは結ばれる。コノハナサクヤとは、またの名を、神阿多都比売（カムアタツヒメ）とも言う。阿多とは、「阿多隼人」の徴である【註13】。つまり、隼人の一族のヒメが、コノハナサクヤで、天孫ニニギは、隼人のヒメ、コノハナサクヤと結婚したということの意味している。このように、『古事記』の日向神話には、隼人の姿が、たびたび登場する。

周知の通り、宮崎は、『古事記』の重要な舞台である。しかしながら、そもそも、なぜ、日向が、その舞台となったのか。端的に言っ

て、その理由は、この隼人がいたからである。西郷信綱を引きながら、古事記学者、三浦祐之は、こう言っている。「天孫降臨神話において、二ニギが高天の原から日向に降りていくというのは」、「九州南部はまだヤマトにまつろわぬ隼人たちが棲む世界であり、辺境の地だったから」である【註14】。つまり、「九州南部」は、いまだ天皇家の支配が及んでおらず、まだ朝廷の支配下にはない「まつろわぬ隼人たち」がいる。だからこそ、政治的なメッセージを込めて、あえて日向を、神話の舞台に選んだということなのだ。

日向の国が、いつ頃できたのかは、定かでない。『古事記』の中の国生みにも、日向の国というの存在していない。イザナギとイザナミが交わり、大八島を生む『古事記』の国生み。その大八島のひとつが、現在の九州にあたる筑紫である。その筑紫が持つ、四つの顔のうちのひとつに、熊曾の国がある。「熊曾のクマは、熊本県南部、ソは宮崎県南部から鹿児島県を含む地域」だと言われ、この熊襲の一部もしくは全体を、(少なくとも日向の国の南部四郡を割いて大隅の国がより独立した)和銅六(七一三)年より以前の、ある時期から日向という名で呼ぶことになったと推測される【註15】。古事記中巻には、ヤマトタケルが熊襲の頭領を討伐する、という物語が展開される。その物語を踏まえ、野蛮なクマソが討伐されて、ヒムカという名前に改められた、とも考えられている【註16】。

谷川雁は、碁石を通じて、日向と熊野をつなげたが、まさに、雁の読み通り、日向／隼人＝熊曾と熊野は、きわめて、似た位置にあったと考えるのが自然なのだ。

そうであるならば、日向で、『古事記』を読むときに、神武の側からのみ読んでいるのでは、やはり、不十分だと言わざるを得ないだろう。むしろ日向で、『古事記』を読む場合、熊野の側から読んだほうがよく、さらに言えば、天孫の側からではなくコノハナサクヤという隼人のヒメの側から読む、あるいは、山幸に打ち負かされ

た海幸、隼人の側から読むのがふさわしいとも言えるだろう。

「天孫が光臨した」という、神々しい喜びに満ちた物語というのは、あくまで、外来者／天皇の側から語る物語である。当時の隼人ももとの土地の者、日向の側から見たならば、事態は、決してそうではなかったと思われる。熊野と同じく、隼人＝熊曾をはじめとする、もともと日向にいた土地の者にとっての、天孫とは、外からやってきた侵入者であり、侵略者であり、つまるところ、擬制の神に他ならなかった。

上橋菜穂子は、『月の森に、カミよ眠れ』という小説において、まさに、このように、『古事記』の中で語られる出来事を、日向の隼人の側から書きなおすという行為を試みている。では、そこでは、いかなる物語が展開されるのか。以下、小説『月の森に』の物語の構造を整理しつつ、大きな読み筋を示していくこととしよう。

5、うら若い語り部と「神の嫁」

まず、『月の森に、カミよ眠れ』の登場人物を確認しよう。この小説は、隼人を主人公とする物語だが、相関図に示す通り、この小説には、ひとりのヒロインがいる。キシメという年頃の隼人の女の子である。そして、このヒロインをめぐる、二人の隼人の男、ナカダチと、タヤタが登場する。キシメ、ナカダチ、タヤタによって作られる三角形が、この小説の物語の中心に配されている。

キシメは、「都からもっとも遠くはなれた クニのハテ」にある隼人の一族の女である。ただし、最高の巫女・カミの母、カミンマとなるべき資格を持つ、特別な女である。カミンマとは、土地のカミと結婚して、神の子を産む神の母、すなわち、カミとの 絆をつなぐ、特別な使命を負うものであり、このムラで、その役割を

担うことが期待されるのが、このキシメという女である。

タヤタも、ナカダチも、いずれも、隼人のカミの子である。キシメは、この二人のカミの子のうち、どちらかを選ぶ岐路に立ち、その間で揺れ動く存在として、物語世界を生きている。かくして、この小説の基本構造のひとつは、女性一人と男性二人の三角形にあり、そのキシメの選択の行方を、読者は、追跡することになる。

ただし、このキシメの選択は、単に、個人的な恋愛における、それに限られていない。その選択は、キシメのムラの運命、共同体の未来に強く、関わっている。すなわち、その選択は、一人の女としての個人的なものであると同時に、家、さらには、共同体全体の未来に関わる公的なものとして現象している。

二人の男のうち、本来、キシメが結ばれる許嫁とも言うべき相手は、タヤタである。タヤタは、キシメのムラのカミの子であり、キシメの村のはずれにある、月の森のカミと、母である隼人の女ホオズキヒメとの間に生まれた。幼い頃、キシメは、月の森に迷い込み、そこで、タヤタと出会い、初恋とも言うべき淡い交わりを持つに至る。やがて、年頃になり、カミであるタヤタに求婚されることとなるのだが、その求婚を受け入れることは、すなわち、カミとの絆をつなく、最高の巫女・カミの母 カミンマ となることを意味している。とはいえ、タヤタは、人間ならざるもの、カミである。そのカミへの畏れに駆られ、キシメは、どうしても、タヤタとの結婚に踏み切れずにいる。

キシメが年頃となり、嫁入りの選択を行うべき時期になった頃に、この小説の現在は、おかれている。ちょうど、その頃、このムラは、ひとつの転換期を迎えていた。中央/朝廷が行う、班田の制を受け入るか、否か、という選択である。班田の制を受け入れ、米を作り、租という税を収める。それは、すなわち、このムラが朝廷へ服属する一地方となり、中央の制度（律令制）に完全に組み入れられるこ

とを意味していた。稲を作って租を収めねば、「こんな小さなムラは滅ぼされるだけだ」という声が増しに大きくなるばかりの中、中央の制度の中に組み込まれるのか、否かという岐路に、いま、キシメの「ムラ」は立っている。

そうした中、ムラの男たちは、もはや、受け入れやむなしと考え、稲を作る田の候補地を探し始める。その候補となるのが、カミの掟が「ふれてはならぬ」と禁じる かなめ の沼であった。カミが棲む月の森とムラの境にある湿地地である かなめ の沼を、ムラ人のものとし、さらに、そこにて稲作りをはじめめる。そのためには、神タヤタを殺させねばならない。いま一人のカミの子、ナカダチとは、その巨大な力をもって、この神殺し/タヤタ殺しを助けるべく、このムラに呼ばれた、助っ人なのだった。

こうしたムラの転換期の中、キシメが、どちらの男と結ばれるのか、というのは、まさに、このムラの未来を選ぶという行為と等しいものであったと言える。キシメが、この二人のどちらを選ぶのか、あるいは、いずれも選ばないのか、あるいは、別の男を選ぶのか、というのが、この小説を読む、読者の、頁をめくる手を進ませる、ひとつの動力になっている。

さて、この小説は、キシメのムラに、その神殺しの助っ人として呼ばれた、ナカダチが到着したところから、始発されている。全体は、序章と終章とその間の第一章、第二章とで構成されており、全体のうち、終章以外の章は、すべて、キシメか、ナカダチ、いずれかが、語り手をつとめている。どちらかが、視点人物となつて、それぞれが話す、語りの言葉として、小説は、記されている。

このように小説は、男女二人の隼人に視点をおき、声や言葉を与えている。その点で、この小説は、『古事記』を、海幸の側からも、そして、コノハナサクヤヒメの側からも書き変える、そのような意図を持って書かれている、と言えよう。

また、この二人の男女の対は、この小説の中で、語り部の任を担っているとも言える。しかし、この語り部の二人は、いずれも非常に若い、十代後半か、多く見積もっても、二十代のはじめである。世界的に見ても、通常、語り部といえは、翁と老婆、つまり、古老である。しかし、この隼人の物語の語り部は、うら若い、男女がとめている。このように、うら若い語り部を設定したことには、おそらく、意図があり、それは、朝廷の圧力で、隼人の自立が奪われていく、その隼人の独立のはかなさ、その自治の短命さを、強調するためだと思われる。

そして、この小説が優れて『古事記』の異奏たる所以は、キシメという一人の女性を通して、隼人の物語を描いた点にある。大和朝廷/天孫、神武、天皇家との関わりの中で、南九州の隼人は、虐げられ、征服されていった一族である。その隼人の中でも、もつとも多くの矛盾を背負わされた者の一人が、キシメのような女であったと言える。

すでに述べた通り、キシメというのは、隼人古来のカミと結ばれ、カミとの 絆 をつなぐ最高の巫女・カミの母 カミンマ となるべき女性である。そして、古代天皇制が諸国を支配していく過程で、その道具として利用されたのが、他でもないキシメのような女性であった。民俗学者/折口信夫は、次のように言っている。

だから国を併せる事は、国々の神を、宮廷に集める事であつた。その為の誤りない方法は、国々の神に仕へてある最高の巫女を妻とする事であつた。巫女と結婚し、巫女を迎へる事は、同時にその国々の神を、宮廷に迎へる事になる。かう信じてをつた古代である。【註17】

「神の嫁」とは、国々の神に仕える最高位の巫女のことである。

それぞれの国が祀る最も尊い神へと仕える、この巫女は、一生独身、独り身のままで生涯を過し、世俗の世界において婚姻関係を結ぶことは、一切なかった。なぜなら、ここでの巫女は、文字通りの意味で、神の嫁であつたからである。つまり、この巫女は、神を夫に、終生、その身を神に仕えさせた。

古代、天皇が、国々から求めたのは、このような「神の嫁」であつたと言える。なぜ、天皇の下に国々の神の嫁が集められたのか。その理由は、神の嫁を娶ることが、そのまま、その夫となる天皇を、国々の神の位置へ、つかせることに直接的に寄与したからである。本来、土地の神と結ばれていた巫女を、娶ることで、自らを、その「神の嫁」の夫たる位置、すなわち国々の神の位置におく。これが、古代天皇が、諸国を治め、支配下とするために用いた「誤らない方法」だったのだ。

こうして見るならば、キシメという女は、天皇へ娶られていった数々の女たち、国々の神の嫁そのものだと言える。それは、言い変えれば、もしかすると望まない結婚を強いられたのかもしれない、コノハナサクヤヒメというべき存在でもある。

『古事記』の中では、このように天皇に召し抱えられた隼人の女が、主人公となつて、自らの心理をあますことなく語る場面はない。そもそも、その姿すら、時に見えないものにされてしまつていとも言える。小説『月の森に』の中で、キシメは、自分の恐れ、喜び、悲しみなど、自らの心理をつまびらかに語っている。キシメという女が、何を感じ、何を思い、そうして、何を、どう生きたのか。それは、『古事記』の中では、けつして自ら語ることのなかつた「神の嫁」/隼人の女のそれに他ならない。その心理や生の軌跡を、作家ならではの想像力で埋め、声を与え、その言葉をつぶさに伝えるのが、小説『月の森に』なのだと言えるだろう。

6、ファンタジー 現実を異化するための言葉

さて、このように、隼人の側から、『古事記』を書き換えるプロジェクトとして、この小説の読み筋を示してきた。最後に、この『古事記』を変奏する小説が、現代の読み手へ手渡す事柄を、急ぎ足で、三つほど確認していこう。

まず、ひとつめとしてあげられるのは、この小説が持つ、現代社会の鏡としての働きである。この小説の隼人の物語は、質は違えども、現代の地方のあり方と似ていなくもない。

たとえば、この小説では、中央の支配が地方の隼人に及び、その「開発」によって、翻弄され、疲弊していく。それは、たとえば、いま宮崎がおかれているような、現代の地方社会の疲弊のあり方のようにも見える。この小説は、まるで現代の似姿を映す鏡のようである。その意味でも、この小説は、『古事記』という中央が語る物語を、地方の側から、読みかえる、ということの重要性を、説いているのだと言える。

二つ目は、農耕の起源にあった暴力を想起させる、ということである。

この小説の中で、キシメのムラは、稲を作りはじめる。ただし、そこには、圧倒的な暴力が働いており、命の喪失、死というのが、引き換えとして、存在する。小説の中で、農耕文化の誕生は、ひとつの命の喪失と表裏である。つまり、小説は、農耕の始まりが、他ならぬ暴力行為であった、ということを表現している。

現代人は、田圃に水が張られ、田植えをされた風景を見ると、初夏を感じ、また、黄金色に染まった稲穂を見ると、実りの秋を祝うといった具合に、田圃や稲作りなど、農耕に関わる風景を、あたか

も自然の営みの一部のように、感じてしまう傾向がある。だが、それは、原理的に言えば、誤りである。

米というのは、人間のためだけに作られる食料である。それを作るためには、もとは自然のものであったはずの土地を、人間たちのものとし、また、その土地を農耕に適した形で改変するという行為が不可欠である。つまり、それは、その土地に元々いた動植物を締め出して、その土地を奪うという行為と違うものではない。このように、農耕のはじまりというのは、自然に対する植民や「開発」といった暴力と全く無縁ではいられない営みだと言える。しかしながら、現代人は、そのことを、すっかり、忘れてしまっている。狩猟採集の文化から、農耕文化へという文明の第一歩。この人類の第一歩は、かぎりなく、大きな一歩だと言える。農耕文化に入って、富の蓄積が始まり、権力も発生し、身分も別れていく。この小説は、こうした農耕文化へと人類が進む大きな一歩、その一歩が携える、圧倒的な暴力を、わたしたちに、想い起こさせる【註18】。

最後に、三・一以後の世界に対する、この小説が行う問題提起である。この小説は、あたかも、危機を知らせるカナリヤのように、現代社会に警鐘を鳴らしている。

小説の中にある「要の沼」。そこは、人が通常入ることはできない、カミの掟 によって、けしてふれてはならぬと禁じられた場所であった。その「要の沼」に、キシメのムラの人々は、田を作り、稲を作ろうとする。

その「沼」を、小説は、どのように描くのか。少女時代、キシメが、タヤタに連れられて、はじめて「沼」を訪れる場面。その場面を、カミンマであるキシメは、ナカダチへ、次のように語っている。

気がつくと、あたりが一変していました。目に見えるもの、肌で感じるすべてがかわってしまったのです。足もとから大地が消え

て……いえ、大地はたしかに足の下にあるのですが、大地も森も天も、すべてが深いヤミにかわって、まったく境がなくなりました。夜の闇の中には数知れぬ光の渦が、ぼうつとホタル火色に脈うちながら、らせんになってまわっているのです。石や草木、虫、わたしまでが、すべて光の渦になって、虫の羽音のようになかすかなさざめきをたてながら、ゆるゆるとまわり、ながれ、おどつていたのです。

すべての光の渦は、天の川のように大きな流れになっており、その流れがまた、渦まいていました。かなめの沼は、はるか地の底までつづく深い穴にかわっていて、大きな渦は、そこから生じているのか……。そこに尾をひたしているのか……。ぐるぐるとぐるをまき、ゆつたりと脈うつように光っては、闇にとけ、また光。それはまるで……。

カミンマは、浅く息をつき、唇をしめした。

……まるで、信じられぬほど大きな、蛇に見えたのです。【註19】

この場面が描くのは、人間の文化では絶対に制御不可能な、人知を越えた圧倒的な自然だと言える。三・一一の東日本大震災という「原発震災」は、どんなに甘く見積もっても人災という側面を有していると言わざるを得ない。原子力という制御不可能な力を手にしてしまった人間が引き起こした人為的な災害なのである。

この小説が提起するのは、やってはいけないことをやってきた人間の文明全体に対する、古典的ではあるが、しかし、三・一一以後の世界で非常に現代性を有する、重大な警告のように思える。そう、自給自足の狩猟採集の文化を越えて、文明への一步を踏み出した地点から現在まで、人間の歴史の総体すべてに対する、限りのない警鐘のように。

その意味で、この小説が、ファンタジーとして書かれていることの意味は、決して小さくはないだろう。ファンタジーというジャンルは、現実とは異なる世界を描くものである。しかしながら、そのファンタジーは、想像の世界、虚構ではあるけれども、しかし、それは、決して、でたらめではない。全くでたらめな非合理的な世界ではない。それもまた現実とは異なる論理で一貫して構築された一つの世界、合理的な世界である。そのように作られた、もうひとつの異世界に並べれば、現実もまた、同じように、ある合理性に担保された、ひとつの虚構に過ぎないとも言える。すなわち、ファンタジーという異世界は、現実もまた、いくつかある中の、ひとつの世界に、ひとつの虚構に過ぎない、そういった相対化を、可能にしてくれるのだ。

読めば必ず感じるように、この小説の中の未来というのは、決して明るいものではない。むしろ、非常に暗いものである。しかし、そのような小説を、読み手は、虚構という形で蓋をして、そして、ふたたび、現実の世界に戻る、ということをする。つまり、ここには、二つの世界の行き来、往還があり、その中で、そのうちのひとつを現実として選び取る。そうであるならば、逆のこと、いまわたしたちが生きている現実を、ひとつの虚構として捨て去り、別の現実を作り上げていく、といったことも可能だろう。

文学とは、なにか。さまざまな定義がある中で、この小説「月の森」を読む行為において、最も重要だと思われるのは、それをそうとはつきりと言わなくとも、もっとも大切な事柄を伝えてくれる言語という点である。決して、それを直接的には言わない、非常に間接的な形でありながら、もっとも大事なことを、それを直接的に言う以上の深さと広がり、伝えてくれる言葉。たとえば、武力をもって、何事かを、解決するような手段、戦争を、愚かな方法として、捨て去りたいと思い、それを、誰かに伝えるようと人がするとき、

もつとも力を発するもののひとつが、文学である。たとえば、戦争で大切な人をなくした人の物語が、人の心をうち、揺り動かす、世界を、ほんのわずかでも、よき方向へと導くことは、まま、あることだろう。力をも入れずに世界を動かし、世知辛い世の中で猛々しくなつた人心をもなぐさめる。事程かように、文学は、大切な事柄を、余す事無く伝える可能性を孕んだ言の葉ノ事の葉だと言える。

上橋菜穂子は、『月の森にカミよ、眠れ』という小説の中で、この文学の力を遺憾なく發揮していると思われる。

そして、そのような、いま、ある世界を唯一のものとはしない、そういった想像ノ創造の源泉として存在する、上橋菜穂子の小説『月の森に、カミよ眠れ』。その小説の豊かさは、別様の『古事記』を書くという作家の決然たる態度こそが、確かに、可能としているものなのだ。

【註1】

上橋菜穂子は、一九六二年、東京都生まれ。日本児童文学者協会会員。香蘭女学校中学校・高等学校を経て、立教大学文学部史学科卒業、同大学院博士課程（後期課程）単位取得退学。後に博士（文学）（立教大学、二〇〇七年）。女子栄養大学助手、武蔵野女子短期大学非常勤講師、川村学園女子大学講師を経て、同大学児童教育学科教授、二〇一二年時十月には、特任教授として教育学部児童教育学科で児童文学を担当。主要作品年譜は、以下の通り。

- 一九八九年 デビュー作『精霊の木』（偕成社）
- 一九九二年 『月の森に、カミよ眠れ』 日本児童文学者協会新人賞
- 一九九六年 『精霊の守り人』 第三四回野間児童文芸新人賞
- 一九九七年 第四四回産経児童出版文化賞ニッポン放送賞
- 二〇〇〇年 『闇の守り人』 第四〇回日本児童文学者協会賞
- 二〇〇二年 『守り人シリーズ』 第二五回巖谷小波文芸賞
- 二〇〇三年 『神の守り人』 来訪編、帰還編、第五二回小学館

【註2】

児童出版文化賞

二〇〇四年 『狐笛のあなた』 第四二回野間児童文芸賞受賞、

第五一回産経児童出版文化賞推薦作品

二〇〇九年 『Moribio: Guardian of the Spirits』

（『精霊の守り人』英訳版） The Batchelder Award

二〇一四年三月二十四日・国際アンデルセン賞作家賞

上橋菜穂子『月の森に、カミよ、眠れ』の初版は、一九九一年に寄せられた偕成社より出版され、二〇〇〇年に、偕成社文庫より再版された。再版の上橋のあとがきによれば、再版にあたって、若干の加筆修正が施されたとある。本文中の引用は、すべて、この再版された二〇〇〇年の偕成社文庫による。

なお、本稿における上橋菜穂子『月の森に、カミよ、眠れ』をめぐる考察は、「南日本の稗史小説とファンタジー 上橋菜穂子『月の森に、カミよ眠れ』をめぐる覚え書き」（『宮崎公立大学開学20周年記念論文集』宮日文化情報センター 二〇一四年六月）、および、『中上健次集 三』『月報』に寄稿したエッセイ「谷川雁と中上健次」（インスクリプト社 二〇一五年一月）と

一部、重複している。ご了承ください。

『精霊の守り人』は、二〇〇六年八月、NHKFM「青春アドベントチャー」枠でラジオドラマ放送（二〇〇七年四月に再放送）。その後、同作品は、NHKBS2にてアニメ化された。放送は、二〇〇七年四月七日から九月二十九日の間で全二六話で、アニメーション制作は、プロダクションIG、監督・脚本は、神山健治。

『獣の奏者』は、アニメでは『獣の奏者エリン』と題され、NHK教育テレビで、二〇〇九年一月一〇日から同年二月二六日の間で全五〇話、放送された。アニメーション制作は、同じくプロダクションIGとトランス・アーツで、監督は、浜名隆行。また、『獣の奏者』は、二〇〇八年（平成二〇年）一〇月、『月刊少年シリウス』（講談社）で武本系会の作画で漫画化されてもいる。二〇〇九年五月に第一巻がシリウスKC（講談社）より刊行され、既刊九巻。作画は青い鳥文庫版と同じく武本系会が担当。

【註3】放送九〇年記念の大河ファンタジーとしてNHK「精霊の守り人」を放映。

総合テレビで、二〇一六年春から三か年にわたって全二二回放送予定で、監督は大森寿美男、主演は綾瀬はるか、演出は片岡敬司戸と発表された。

【註4】博士學位論文は、『ヤマジ』ある「地方のアポリジニ」のエスニック・アイデンティティの明確化と維持について』（立教大学平成一九年九月三〇日）。専門の文化人類学に関する上橋の著書には、以下のものがある。

『歴史の狭間を生きたアポリジニの老人たち』老いの人類学（青柳まちこ編）世界思想社 二〇〇四年三月）

『アポリジニの過去と現在 アポリジニ政策について』オーストラリアのマイノリティ研究（早稲田大学オーストラリア研究所編）オセアニア出版社 二〇〇五年三月）

『都市アポリジニの先住民文化観光』「先住民」とはだれか（世界思想社二〇〇九年一月）

『隣のアポリジニ 小さな町に暮らす先住民』（ちくま文庫 二〇一〇年九月）

【註5】上橋菜穂子『月の森に、カミよ眠れ』（偕成社文庫 二〇〇〇年）「あとがき」には、次のように記されている。「はじめてこの物語を書いてから、もう九年も経ってしまいました。／この機会に久しぶりにこの物語を読みかえしてみ、ある感慨をおぼえました。／もちろん、まずまっ先に目についたのは、「うわあ！」と頭を抱えて逃げだしたくなるほどの未熟者なのですが、それでも、あのころの自分の若さ……その若さゆえの圧倒的な熱のようなものを感じたのです。人生の、ある時点でしか生み出せない物語というものがあるのだと、しみじみ思いました」（二三四頁）。

なお、上橋菜穂子『月の森に、カミよ眠れ』をめぐる本稿の引用は、以下、本書により、頁数のみ示すこととする。

【註6】上橋前掲書「あとがき」二二二～二二三頁

【註7】六九頁。谷川雁「馮依の分裂を知る者 中上文学・二泊三日の旅から」（『KAWADE道の手帖 谷川雁 詩人思想家、復活』（河出書房新社 二〇〇九年））。初出『国文学』一九八五年三月号だが、本稿の引用は、『KAWADE道の手帖 谷川雁 詩人思想家、復活』への再掲原稿による。

【註8】中上健次『紀州 木の国・根の国物語』（『中上健次全集十四』、集英社 年）四八二頁。『紀州 木の国・根の国物語』（以下、『紀州』と略記）の初出は、『朝日ジャーナル』（一九七七年七月一日号～一九七八年一月二十日号）

【註9】「紀州」『中上健次全集十四』、四八六頁。

【註10】中上健次「バサラの美」初出『すばる』一九八四年四月号、『エッセイ撰集 文学・芸能篇』、三八一頁。（恒文社 21、二〇〇二年）

【註11】「紀州」『中上健次全集十四』、六七七頁。

【註12】「兄ホ德里は、「隼人阿多君の祖」と伝えられ、彼らは隼人舞と称する服属儀式の舞を天皇の即位儀礼である大嘗祭の折などに定期的に演じています。その起源が、この時の溺れたさまを再現したものだと古事記の神話は語ります」三浦祐之『古事記を読みなおす』ちくま新書 二〇一〇年一〇七頁

【註13】隼人に関する記述は、中村明蔵の仕事に多くを負っている。本稿で、主に参考にしたのは、以下の文献である。

中村明蔵 『かごしま文庫29 ハヤト・南島共和国』春苑堂出版 一九九六年

中村明蔵 『神になった隼人 日向神話の誕生と再生』南日本新聞社 二〇〇〇／二〇一三年

【註14】中村明蔵 『隼人の古代史』平凡社新書 二〇〇一年

三浦祐之『古事記を読みなおす』ちくま新書 二〇一〇年一〇〇頁

【註15】三浦前掲書 九九頁

【註16】三浦前掲書 九九頁

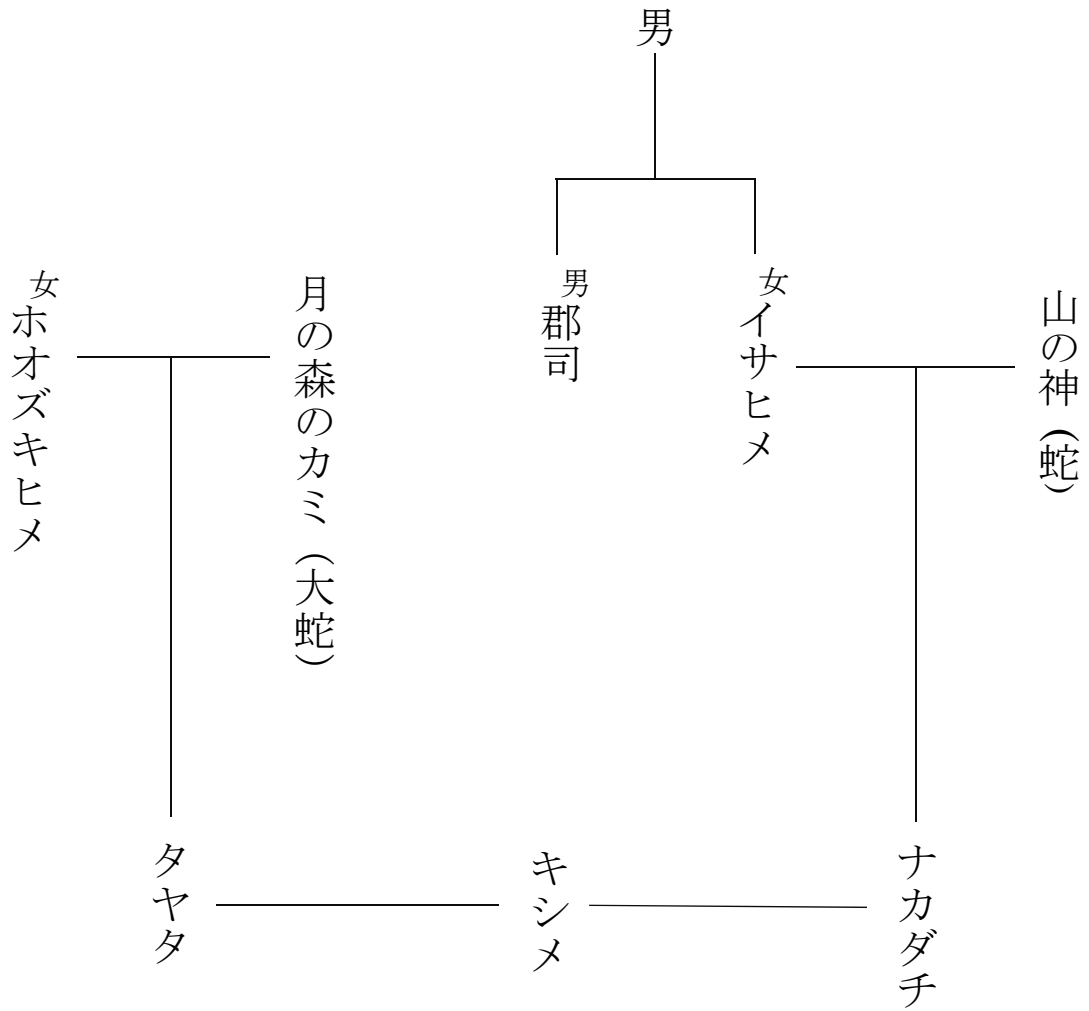
【註17】折口信夫『国文学 第二部 日本文学の戸籍』折口信夫全集

【註18】 十六『中央公論社、一九九六年、二二九～二三〇頁。谷川雁が、熊野を「金持つ国の試金石」として想像／創造したことも、おそらく、ここに関わる。「金」とは、定住農耕文化によって、蓄積されることになった富そのものであると同時に、その農耕文化の発展に大きく寄与した金属文化のことでもあろう。鉄器による農具、開墾具は、農業生産力を飛躍的に向上させた。

【註19】 上橋前掲書 七八～七九頁

〔附記一〕 本稿は、二〇一四年九月二七日に行った平成二六年度宮崎県文化講座「現代文学の中の『古事記』」（於：宮崎県立図書館）を基に執筆されている。講座をご依頼くださった宮崎県立図書館のご担当者および、本講座の参加者すべてに感謝申し上げます。

〔附記二〕 本稿は、日本学術振興会・科学研究費助成事業 若手研究B（H26～H28）「現代文学における「地域」と「開発」をめぐる系譜学的研究」（研究課題番号：26870514）における研究成果の一部である。



『月の森に、カミよ眠れ』 人物相関図／系譜

月の森に、カミよ眠れ

もくじ

序章 〈訪れた者〉と〈カミ〉のすもう

第一章 過ぎさりし時の語り

- 一、オニの息子のこと
——ナガタチの語り
- 二、月の森に住まう、ふしぎな親子のこと
——カミシマの語り
- 三、ホタル火色の瞳のこと
——カミシマの語り
- 四、大蛇ガミの死のこと
——カミシマの語り
- 五、山のカミに心ひかれた娘のこと
——カミシマの語り
- 六、ふたつの歌のこと
——カミシマの語り
- 七、月の森のカミが、怒りたもうたこと
——カミシマの語り

第二章 夏の満月の夜まで

- 一、夜明けとわかれ
- 二、カミを殺せ
- 三、ナガタチの決意
- 四、ホタル火に燃える闇
- 五、月の森に、カミよ眠れ

終章 「むかし、むかし……」

あとがき

文庫版あとがき

〈解説〉 失われしものへの哀歌
——石堂 藍

カバー・表紙絵——篠崎正喜

本目次は、2000年に再販された偕成社文庫によるものである。

り立たない。そのためにはまず、地域の方に幸島観察所がどのような研究や教育活動を行っているかを知ってもらい、そして、実際に幸島に渡って見てもらう。研究というのは世間一般から離れた存在になりがちだが、もっと身近な物だという事を感じていただきたいと思っている。現在、地域の小学校では幸島の見学が授業の一環として行われている(Fig.28)。主催は様々だが一般の方を対象に幸島での観察会、見学会(Fig.29)なども行なわれている。ぜひ、このような機会を利用して幸島の野生ザルを観察していただきたい。ニホンザルはまだまだ分からないことがたくさんある。それを少しずつ解明できる場所が幸島ではないかと感じている。



Fig.29 観察会の様子

参考文献

国指定天然記念物「幸島サル生息地」保存管理計画書 串間市教育委員会 1997

Masao Kawai. Newly-acquired Pre-cultural Behavior of the Natural Troop of Japanese Monkeys on Koshima Islet 1965

今西錦司 私の霊長類学 1976

長野浩一 幸島 サルたちの楽園 長崎新聞社 2004

半谷五郎 霊長類の個体群変動:長期調査に基づく個体数変動 2009

辻大和 野生ニホンザルの採食する木本植物以外の食物 2012

SuzumuraTakafumi. DEMOGRAPHIC DATA OF WILD JAPANESE MONKEYS ON KOSHIMA ISLAND PRELIMINARY ANALYSIS OF THE PERIOD 1952-2009 2010

が開始された。それだけ長い歴史がある。そしてその歴史は継続されてきた。どこにでもいるニホンザルが類を見ないデータを持つことで世界的に貴重になった。多くの外国人研究者達は日本に来ることがあれば是非幸島を訪れたいと言う。日本の霊長類学が始まった場所をこの目で一度見たいと言うのだ。それはモニュメント的な意味合いで存在するわけではなく、それが現在なお継続されていることに強い尊敬を持っているのではないかと感じる。そして幸島を訪れた一部の外国人研究者は再び戻ってくる。

研究テーマと共に。そこには幸島でしかできない研究がある。ニホンザルを支える膨大なデータ、島という閉鎖された環境。島は無人島で、島と本土との間に海があり、外洋に面した場所で台風や低気圧ですぐ波が立つ。思うように調査できない日が何日も続くこともある。調査環境としては決して恵まれた方ではない。それでも、彼らはやってくるのだ。幸島は今、海外の研究者から再び注目されている。これまではニホンザルの生態、行動などサルを中心にした研究が中心であった。しかし、近年はサルと彼

らを取り巻く環境、たとえば植物とサルとの関係、寄生虫との関係など生態系の中でニホンザルがどのような役割をしているかという研究が増えてきた。現在も国内外の多くの研究者が訪れる場所なのである。また、フィールドワークの学習の場として最適な場所であるということがあげられる。これまで京都大学霊長類研究所と野生動物研究センターの修士一年を対象にフィールドワークを学ぶ実習が行われてきた。そして平成 26 年度から霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院の野外実習として組み込まれた。学外では宮崎大学の学生実習にも利用されている。フィールドワークに不慣れな学生でも野生のニホンザルを間近で観察でき、さらにフィールドワークのスキルを磨くことができるのである。(Fig.27) 我々の役割は研究や教育だけではない。研究結果を社会に還元することである。その中でも社会教育活動というのは重要である。私は宮崎に住んで 12 年になり地元の方と話す機会もそれなりにある。しかし、多くの方は幸島のことは知っているが、「芋を洗って食べる賢いサルがいる」「サルに餌をやっ

て良い」「サルを飼っている」「研究施設の存在自体知らない」などほとんどの人は間違っ

た知識を持っていると感じる。我々もこれまでこのような活動を疎かにしていたわけではなかったが、さらに普及啓蒙活動に力を入れる必要があるということを感じている。一般の方に広く正確な幸島に対する知識を持ってもらい、宮崎にはこんな場所があるんだという事を宮崎県の人から発信していただきたい。また、幸島のような野生動物の調査地の多くは地方にある。このような場所では地域の方の理解協力が無ければ成



Fig.27 学生実習の様子



Fig.28 地元小学校の見学

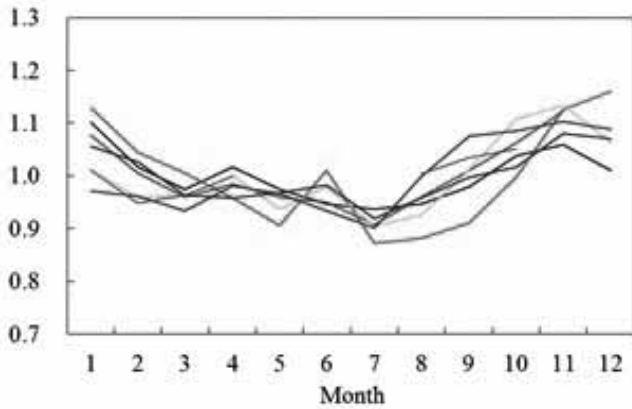


Fig.23 主群オス(2006年)

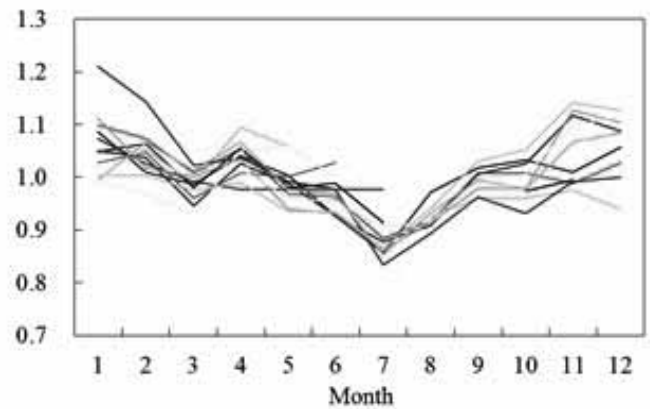


Fig.24 主群メス(2006年)

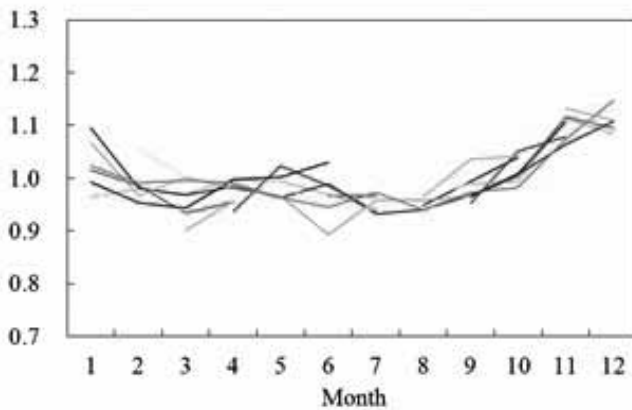


Fig.25 マキ群オス(2006年)

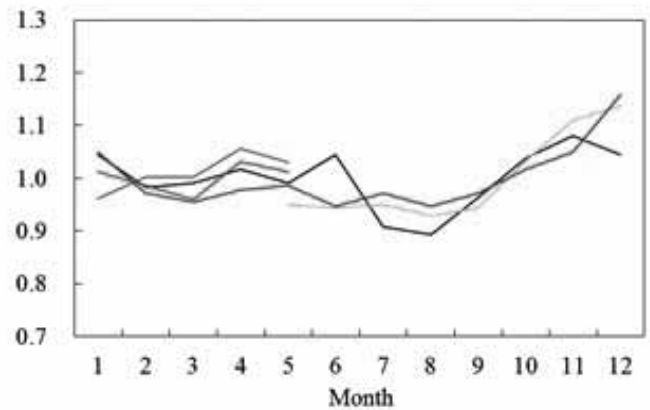


Fig.26 マキ群メス(2006年)

このようにニホンザルの社会・生態は幸島の長い研究の歴史で明らかになった部分も多い。しかし、このデータを見ただけでも様々な疑問がでてくる。主群の Male は現在 8 代目になった。5 代目のノソまでは劣位家系の出身である。そして 6 代目のケムシ以降優位家系の出身となっている。また、主群の Male は一度その座に就くと死ぬまで第 1 位のままである。一方、マキ群は途中で交代することもある。家系では 7 系統あった家系が現在では 5 系統、近い将来い 1 系統消えるのは確実である。一方で優位家系 EBA 系は 70% を超える勢力になった。しかしその中でも順位がある。当然、低順位の個体が出てくる。どのような個体が低順位になってしまうのか。体重では給餌されていないマキ群より給餌されている主群の方が変動が大きい。給餌されている方が安定して採食できるため変動が少ないと考えられるが、実際のデータでは違う。単なる偶然かもしれないしそうでないかもしれない。20 年近く生きる寿命が長い生物を生まれてから死ぬまで観察し続ける。そしてそれを何世代も重ねていく。すると短期間しか観察していただけない新しい疑問がでてくる。給餌も新しい方法に変更された。これによりどのような影響が個体群にあるのか。ニホンザルの生態はまだまだ分からないことが沢山あるのである。

五 おわりに

幸島に生息するニホンザルはどこにでもいるニホンザルである。しかし、日本で最初に霊長類の研究

5歳頃から出産が始まり生涯を通じて出産することがわかる。24歳に出産した例もある。他の地域では4歳ごろから出産が確認されているが、幸島では5歳未満の出産は確認されていない。幸島では初産年齢が高く7歳以降に出産する場合がほとんどである。

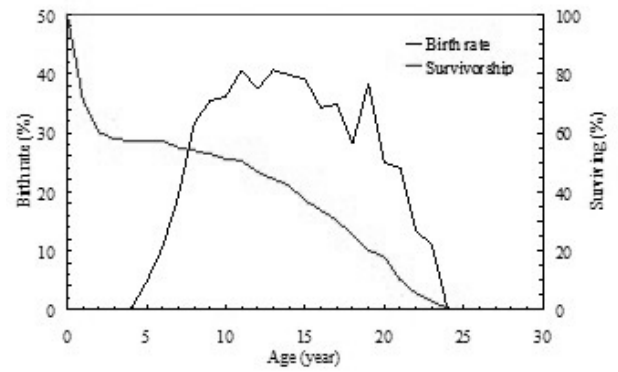


Fig.20 メスの生存曲線と出産率の変化

体重

雌雄それぞれの体重変化を Fig.21~22 に示す。対象個体は2010年12月時点で生存している10歳以上のオトナである。年間の平均体重をその年の代表値とした。オスの体重の推移を見てみると11歳頃まで、メスでは9歳頃まで徐々に成長を続け体重が増加していくことがわかる。平均体重はオスで約10kg、メスで約7kgであった。雄雌ともに20歳を過ぎると体重は減少傾向にある。次に体重の季節

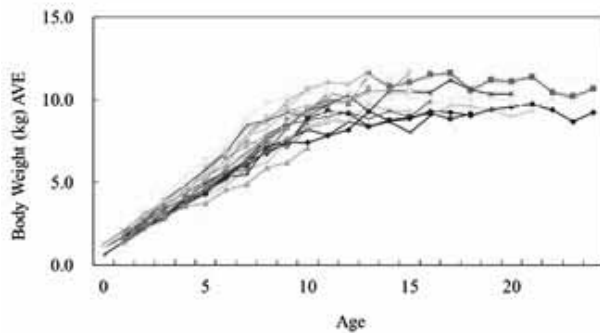


Fig.21 オスの体重変化(2010年)

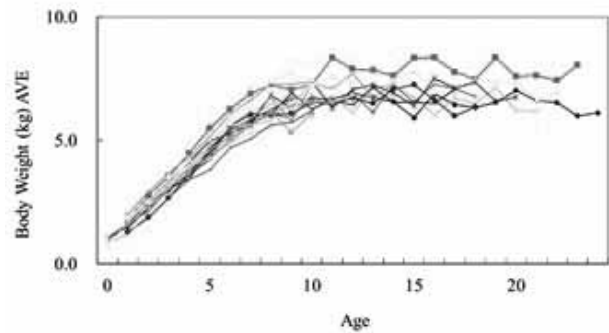


Fig.22 メスの体重変化(2010年)

変動をみてる。Fig.23 ~ 26 にはそれぞれ主群の雌雄、マキ群の雌雄の体重の季節変動を示している。縦軸にその月の体重を年間の平均の体重で除した値、横軸に月を表している。一年間で10~20%ほどの増減がある。両群とも冬にかけ体重が増加し夏に減少するという傾向がみられる。主群では7月が最も体重が落ちる傾向が明瞭にでており8月にすべての個体で体重が増加している。これは7~8月に大豆の給餌が行われているためだと考えられる。一方マキ群では6~8月に体重が落ち8~9月頃まで体重が増加せず11~12月にかけて緩やかに増加している。体重の増減もマキ群の方が緩やかである。

家系図

Fig.16 は1948年から2009年までの母系の家系図である。研究開始当初主要なメス7頭それぞれをひとつの家系として分類している。家系はハラジロ(HRZ)系、ウバ(UBA)系、ノリ(NOR)系、アオメ(AOM)系、ナツ(NAT)系、ナミ(NAM)系、エバ(EBA)系である。ウツボというメスザルはハラジロの母親だと推定されるが、彼女は子供を育てることができなかった。ウツボ系はハラジロ系に含めている。また、彼女は Female であったためハラジロ系は優位家系になる。後に Female の家系がエバ系に移った。現在オスザルが生存するのみで近い将来消滅する。ウバ系はウバがオスを2頭出産したのみで1964年に消滅している。ノリはアオメの母親だと推定されるが、アオメはノリの順位を受け継がなかったため、別の家系とした。アオメ系は2007年に消滅している。ナツ系、ナミ系は劣位家系である。エバ系は Female の家系で最も大きい家系である。現在70%以上がエバ系出身の個体である。(Fig.17)

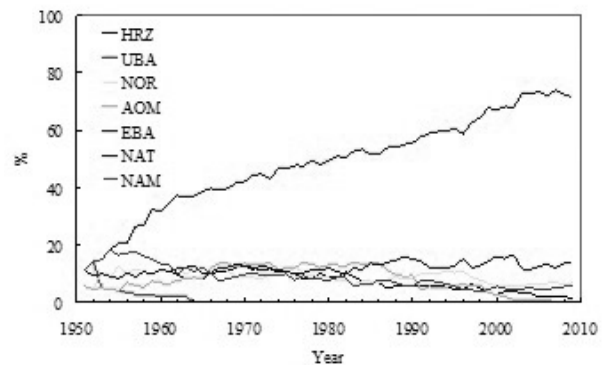


Fig.17 各家系の占有率

寿命

Fig.18 は生存曲線と呼ばれるものである。出生した時を100%としてそれ以降の生存率があるかを示している。1~2歳頃まで死亡率が高く2歳までに40%程度死亡する。その後は緩やかに減少していき25歳頃までにはほとんどの個体が死亡する。平均寿命はオスで8歳、メスで9歳程度である。初期の死亡を除けば中央値は17歳程度になる。

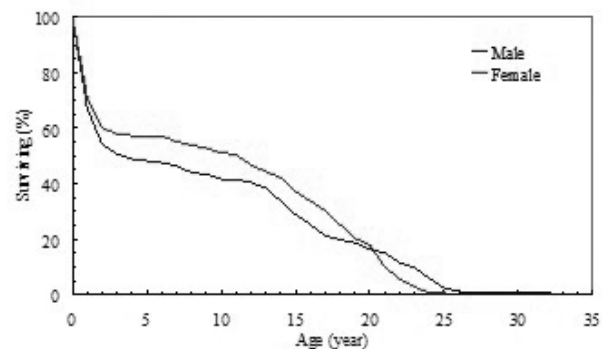


Fig.18 生存曲線

繁殖

ニホンザルは通常2~3年に一度1頭出産を行う。出産間隔も栄養条件などに左右される。Fig.19に給餌条件の変化にともなう出産間隔を示す。給餌量が比較的少ない期間、Period1,3,4における出産間隔は2年が最も多くなっているが、大量給餌されていたPeriod2では約50%の個体が毎年出産する状態であった。現在では毎年出産する個体は稀である。Fig.20にメスの生存曲線と出産率の変化を示す。

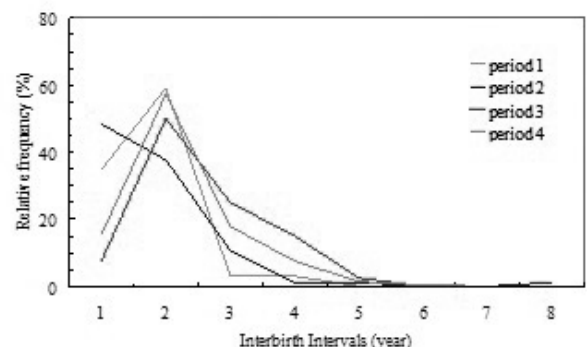


Fig.19 給餌条件の変化に伴う出産間隔

個体数変動

幸島のニホンザルは給餌が行われている餌付け群であるが、彼らが野生の生活を失わないように給餌量は厳密に管理されている。現在、主群とマキ群の2つの群があり、主群に対しては定期的な給餌が行われているが、マキ群に対しては定期的な給餌を行っていない。給餌方法もその時々で変化しており、餌付けが成功した1952年から1960年代前半までは必要に応じて一週間に一回程度の給餌を行い(Period1: 半自然期) 1970年頃までは

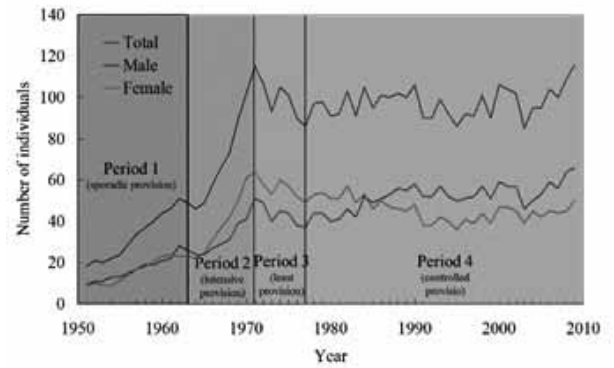


Fig.15 個体数の変化

大量の給餌を行っていた(Period2: 餌付け期)が、個体数が増加傾向であったため1972年からは給餌を厳しく制限した(Period3: 抑制期)。その時、出産率の低下、初産年齢の高齢化など繁殖に問題が出てきたことから1977年から夏場に集中的に餌付けをする方法をとった(Period4: 夏季餌付け期)。この方法は2012年まで続けられた。2012年からはさらに給餌方法が変更されたが今回示すデータにはこの期間は含まれていない。Fig.15に個体数の推移を示す。Period1では緩やかに個体数が増加しているが、Period2になると急激に個体数が増加している。その後、給餌の抑制によって個体数が減少し、Period4に入ると約100頭前後を推移している。

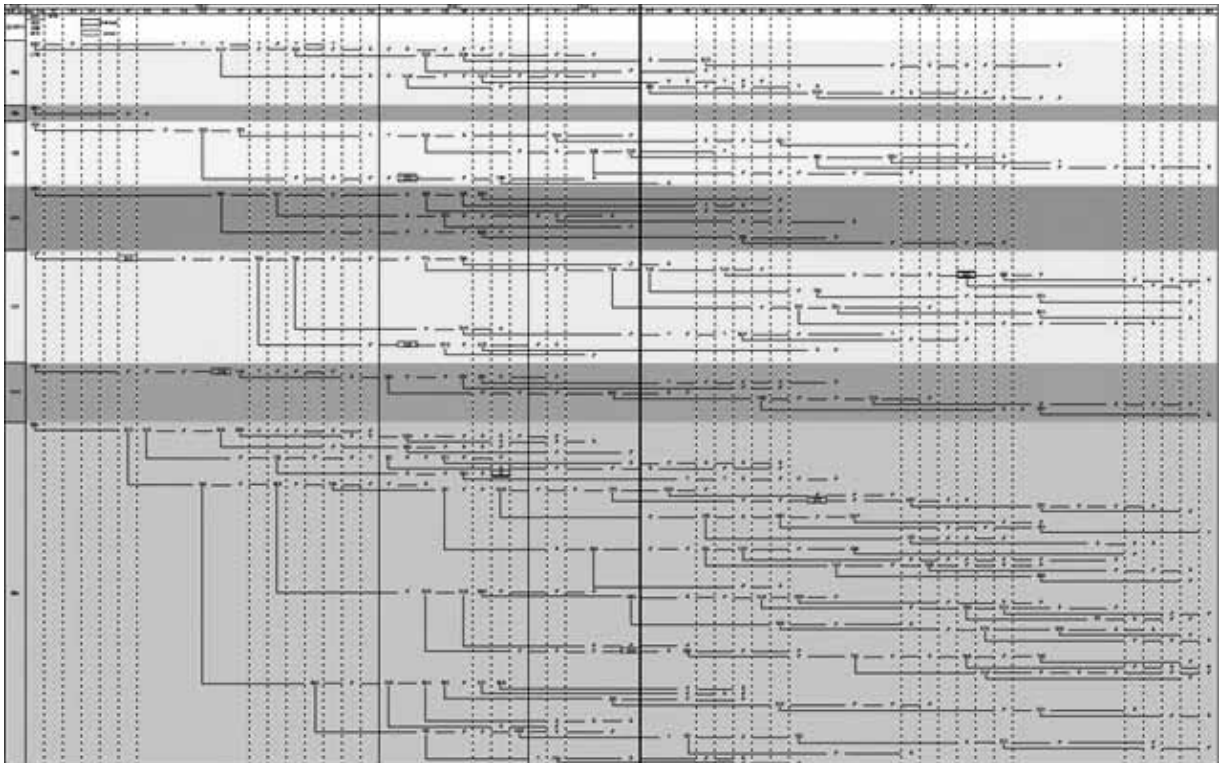


Fig.16 母系家系図(1948-2009)

に付着しているカサガイの類を歯ではがして食べる。砂と麦が混ざったものを水に投げ込み分離させて食べやすくする麦洗い行動(砂金採取法)や夏場に潮溜まりでコザルたちが泳ぐ行動(Fig.14)もある。このように周囲を海に囲まれた島だからこそ生まれた行動がある。この他にも我々の気づいていないところでも「文化的な行動」は行われているのかもしれない。



Fig.14 水泳をして遊ぶコザル

四 長期調査のデータから

ここではこれまで幸島で蓄積されてきたデータを中心に、野生ニホンザルの社会や生態をみていく。まず、ニホンザルの社会であるが大きく分けて3つの特徴がある。群を形成すること、母系社会であること、順位制を持っていることが挙げられる。群(集団)の形にも様々ある。つがいを作って生活している単雄単雌群、一頭のオスと複数のメス、子どもが一つの群れを形作っているものを単雄複雌群などがある。ニホンザルは複数のオスと複数のメスで群を構成する複雄複雌群と呼ばれる集団をつくって生活している。そしてその集団は母系社会である。ニホンザルのオスとメスは異なった一生を送る。

メスは生まれた群からは基本的にでることはない。一方でオスは5,6歳になると生まれた群を離れて単独で生活するようになる。このようなオスの事をヒトリザルまたはハナレザルと呼ぶ。このようにメスが中心になって群を構成する社会を母系社会と呼ぶ。また、ヒトリザルは一生を独りで過ごす場合もあれば再び群に帰って来る場合もある。そして群の中では順位がある。オス、メス別々の順位を持ち、第一位のオスを オス(Male) 第一位のメスを メス(Female) と呼ぶ。オスはいわゆるボスザルの事であるが、我々の感じる「ボス」という意味合いと野生下での彼の振舞とはずいぶん異なるため、現在、ボスザルという呼称は学術分野では使用されなくなった。Table.1 に歴代の Male を示す。初代 Male のカミナリは調査開始当初にはすでに第一位の座についていたためはっきりした在位期間はわからないが、少なくとも20年以上第一位のオスであった。その他の在位期間は2~12年と幅が広い。現在は8代目の Male でカバである。

Table.1 主群の歴代 Male

α -mail	Name	Reign (year)	Reign (Term year)	Lineage
1 st	<i>Kaminari</i>	~1970	Over 20	?
2 nd	<i>Semushi</i>	1970~1977	7	NAT
3 rd	<i>Nabe</i>	1977~1980	3	NAM
4 th	<i>Geshi</i>	1980~1992	12	NAT
5 th	<i>Noso</i>	1992~1999	7	NOR
6 th	<i>Kemushi</i>	1999~2001	2	EBA
7 th	<i>Hotate</i>	2001~2012	11	EBA
8 th	<i>Kaba</i>	2012~Present	2	EBA

るということ、ニホンザルの中では低緯度に生息しているということが考えられる。島に生息する大型生物は小型化する傾向があることを島嶼化という。島という限られた場所では移動できる範囲が決まっている。さらにそこで利用できる食物資源の量も決まっている。そこに生きる生物はそれを分け合いながら生活しなければならない。体を大きく保つにはそれに応じた栄養が必要だが、体が小さいと少ない栄養で体を維持できる。そのため、限られた資源の中ではよりエネルギーの要求が低い体、すなわち小さな個体が適応するという考えである。また、温暖な地域で体が小型化することはベルクマンの法則と呼ばれる。哺乳類などの恒温動物は体で熱を作り出し体温を維持している。高緯度地域では一般的に気温が低く体温を維持する必要があるため体積当たりの体表面積を小さくする必要があるので体が大きくなる傾向があるとされている。これら二つの法則には例外もあるが、このような事から幸島のニホンザルは小型だと考えられている。また他の特徴として高密度であることがあげられる。幸島には 32ha 当り約 90 頭(2014 年 10 月現在)のサルが生息している。密度としては 281.3 頭 / km²である。高密度で知ら



Fig.12 芋洗いをするニホンザル



Fig.13 固形飼料洗いをするニホンザル
(京都大学霊長類研究所)

れる屋久島の海岸部では 62 ~ 100 頭 / km²と 3 ~ 4 倍も密度が高い(Hanya,2009)。これは少量ではあるが給餌しているためであると考えられる。一般の方が幸島のサルの特徴として最初に考えるであろうことは「芋を洗って食べる賢いサル」というものではないだろうか。幸島では最初に文化的な行動が確認されたこともあり、特別賢いサルのように扱われることが多い。しかし、幸島のニホンザルはどこにでもいるニホンザルである。他の地域でもイモ洗いと同じような行動が確認されている。霊長類研究所の放飼場では固形資料を水に浸してやわらかくして食べるという行動が確認されている(Fig.13)。これも一部の他個体に広まっており文化的な行動の一つであると考えられる。このような行動が発現するのは環境的な要因が強いと考えられる。イモ洗いを例にすると、周りに大量の水がある。芋を日常的に与えられている。その芋は泥で汚れていて食べにくい。このような条件がそろったからこそ生まれた行動であった。前述した魚食も文化的行動の一つである。調査開始当初は生魚を食べることはなかったが次第に食べるようになった。原因は、幸島は釣り人が多く渡っており、彼らが岩場に捨てた雑魚が乾燥しそれを食べるようになり次第に生食に移行したのではないかと考えられている。捨てられた魚以外に島にはオオドマリという遠浅の砂浜があり、そこに弱った魚が打ちあがることもありそれを食べることもある。また岩場

のようなデータが30年以上継続されて記録されていることは極めて稀で重要なデータなのである。このように幸島は日本を代表するニホンザルの生息地であると共に重要な研究フィールドになった。現在でも国内外から多くの研究者が調査に訪れ研究活動が行われている。

三 幸島のニホンザル

ニホンザルとはいったいどのような生物なのだろうか。ニホンザルは霊長類の一種で日本にしか生息していない。先進国と呼ばれる国で人間を除く霊長類が生息しているのは日本だけである。日本の中では北は青森県の下北半島、南は鹿児島県の屋久島である。北海道と沖縄県には生息していない。屋久島に生息するサルはニホンザルの亜種のヤクシマザルである。日本は面積の割に南北に長く、寒帯から亜熱帯まで多様な環境を有している。ニホンザルが生息しているのは冷温帯から亜熱帯である。また、人間を除く霊長類の中で最も北に生息している。霊長類は熱帯や暖温帯に生息しているものが多いが、下北半島や志賀高原のように積雪するような寒い地域に生息していることは珍しい(Fig.10)。スノーモンキーという別称もあるぐらいである。一方、屋久島や幸島は亜熱帯植物を含む常緑広葉樹林に生息している。このようにニホンザルは多様な環境にそれぞれ適応しながら生活しており、生息地域によっても食べるものが違う。彼らは草食寄りの雑食性である。幸島では89種類の本木類、30種類の草本の植物を食べていることが確認されている。ほかにキノコ類、海藻類、動物類などを食べている。春にはヤマザクラの果実やアラカシの新葉、夏はハゼノキの種子やクスノキの果実、秋にはアラカシの種子やオガタマノキの果実、冬にはタブノキの葉など季節に応じて手に入りやすく利用しやすいものを食べている。動物類の中には昆虫が多く含まれているが、幸島では魚を食べることが確認されている(Fig.11)。魚食は非常に珍しく他には下北半島で確認されているのみである。(Tsuji,2012) 幸島に棲むニホンザルは小型であることが特徴である。体重で比較してみると寒い地域に住む、たとえば志賀高原のサルではオスでは15～18kg、メスでは13～14kgであるのに対して、幸島ではオスで約10kg、メスで約7kgとオスでは約1.5倍メスでは約2倍と大きな差がある。この原因として考えられるのは、島で生活してい



Fig.10 雪中をラッセルするニホンザル
(青森県下北半島)



Fig.11 生魚を食べる事は非常に珍しい

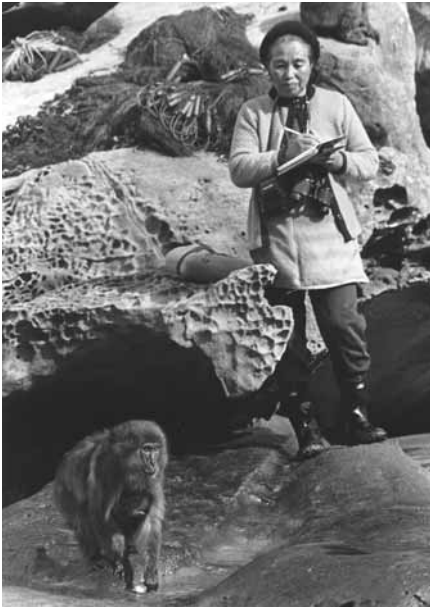


Fig.7 イモ洗いの観察をする
三戸サツエ



Fig.8 麦洗い行動(砂金採取法)

し、他個体に「伝播」し「世代を超えて継承」されることは文化の形の一つとされ、河合雅雄により論文が発表された(Kawai,1965)。人間以外で文化またはそれに準ずるものを持っているという事が世界で初めて確認されたのである。イモ洗い行動以外にも麦洗い行動(砂金採取法)、魚食、水泳など他個体に伝播した行動が確認されている(Fig8)。生物社会学に端を発した霊長類学は研究テーマも多岐に渡り、音声コミュニケーション、群れの順位制、採食選択など様々なテーマで研究が行われた。研究開始から60年以上たった現在も観察が続けられており蓄積された個体のデータは最大8世代になる。これは世界的に見ても最長の部類に入る。このように今西の創案した「餌付け」と「個体識別法」そして「長期の継続調査」という研究手法は野外の霊長類、直接観察できる動物を研究する上で標準的なものとなった。ただ、餌付けは本来の野生の姿に少なからず人為的な影響を与える。そのため、現在屋久島などでは餌を使わないで人に慣らす「人付け」という手法がとられている。ニホンザルのデータでさらに特筆すべきことは毎月一回の全個体を対象に体重測定を行っていることである。野生動物を対象に継続されて行われていることは極めて珍しい。動物の体重は成長や繁殖、個体の状態を知る上で非常に重要な指標であるが、野生動物の体重を測ることは非常に難しい。幸島では台秤の上に少量の餌を乗せてサルが秤の上に上がるのを待つ(Fig.9)という単純な方法で体重を計測している。しかし、すべての個体を計測するのは簡単な事ではない。餌付けを行って長期的に観察し個体の順位、性格を把握した上で体重計の周辺にいる個体をコントロールすることを行うことではじめて可能になるのである。こ



Fig.9 体重計に乗るサル

神様であったことから守り神としてサルを離したという言い伝えがある。真偽は定かではないがそれほど昔から住んでいたのではないか。大正時代の公文書には市木の村人が幸島のニホンザルに餌付けを行っていたことも記されている。また、幸島のサルたちは「わこさま」と呼ばれ神の使いとされてきた。このように地元の人々は餌を与えたりしながら関わりを持っていたようである。市木に住んでいた冠地藤一氏が幸島の自然は保護すべきだとの声をあげ、彼らの尽力によって1934年(昭和9年)に幸島全体が「幸島野生ザル生息地」として国の天然記念物にしてされた。戦後間もない1948年(昭和23年)ひとりの研究者とその学生たちがこの地を訪れた。

二 日本の霊長類学は幸島からはじまった

1948年の春、今西錦司とその学生の伊谷純一郎、川村俊蔵は野生馬の研究のため、都井岬で調査を行っていた(Fig.5)。そこで彼らはニホンザルの群に出会う(今西1976)。サルの群に魅せられた彼らはニホンザルが住んでいる所を調べ、同年12月に再び宮崎を訪れ幸島で予備調査を開始した。このことからサルの研究が開始され、これが日本の霊長類学のはじまりとなった。しかし、調査を開始した彼らは大きな問題に直面する。サルたちは人に対して強い警戒心を持っており、また俊敏であるためなかなか姿を捉えることができなかった。そこで彼らは人間に慣れさせるため、「餌付け」を行うことにした。1951年に餌付けが開始され、最初は全く餌も食べない状態であったが、姿は見えないが置いてあった餌がなくなったりしていき、徐々に姿を見せるようになった。そして、1952年に日本で初めてニホンザルの餌付けに成功する(Fig.6)。このことで至近距離での観察が可能になり、個体毎に名前を付け識別を行う「個体識別法」により個体毎の詳細な観察が可能となった。各個体の出産年月日、死亡年月日などを記録しこれから出産歴や寿命などがわかるようになった。これらの独自な方法により霊長類学は飛躍的に進歩した。1953年に、三戸サツエにより芋洗行動が発見される(Fig.7)。一歳のメスのコザルが砂浜を流れる小川で泥のついた芋を転がし、泥を落として食べている行動が観察され、この行動が他個体に伝播していった。ある行動が「生成」



Fig.5 都井岬にて
今西(中央)と伊谷、川村、徳田



Fig.6 当時の餌付けの様子

るようになった。これらの独自な方法により霊長類学は飛躍的に進歩した。1953年に、三戸サツエにより芋洗行動が発見される(Fig.7)。一歳のメスのコザルが砂浜を流れる小川で泥のついた芋を転がし、泥を落として食べている行動が観察され、この行動が他個体に伝播していった。ある行動が「生成」

一 はじめに

宮崎市から海岸線を車で南に下ること約二時間。串間市市木地区。日本の渚百選にも選ばれる美しい砂浜、石波の海岸が眼下に現れる。この白い砂浜の目と鼻の先に小さな島がみえる。それが幸島である(Fig.1)。九州本土との間には200 mほどの海峡があり、昔から陸続きになったり離れたりを繰り返しており、ここ10年間ほどは離れた状態を維持している。一般に開放されており港にいる渡船を利用することで島に渡ることができる。周囲3.5 ~ 4.0 km、面積約32ha、最大標高117mのこの島には亜熱帯植物を含む照葉樹林が繁茂している。植物相は321種類の植物種が確認されている(1997串間市教育委員会)。また、幸島が自生の北限であるシナクスモドキ、自生地が減少しているタチバナやハカマカズラ(Fig.2~4)などの希少な植物が確認されている。また、長い間伐採など人の手が入っていない事からイヌマキやカゴノキなどの大木(Fig.3 ~ 4)も点在している。動物相を見てみると哺乳類ではニホンザルの他にコウモリ2種、タヌキ、ノウサギ、鳥類ではキツツキ類やヒヨドリ類など19種類、昆虫相では160種類確認されている(1997串間市教育委員会)ここに約90頭のニホンザルが生息している(2014年現在)。どのくらい前からニホンザルが生息していたかは不明だが随分前から居たようである。源平合戦後、市木の集落に祭ってあった平家の祭神、弁財天(イチキシマヒメノミコト)を筏にのせて市木川へ流した。それが幸島にたどり着き、女性の



Fig.1 フィールドミュージアムより幸島を望む



Fig.2 シナクスモドキ 幸島が自生の北限である



Fig.3 イヌマキの大木



Fig.4 カゴノキの大木

目 次

- 一 はじめに
- 二 日本の霊長類学は幸島からはじまった
- 三 幸島のニホンザル
- 四 長期調査のデータから
- 五 おわりに

幸島のニホンザル

～日本の霊長類学は宮崎から始まった～

京都大学野生動物研究センター 幸島観察所

技術専門職員

鈴 村 崇 文

宮崎県文化講座研究紀要 第四十一輯

平成二十七年三月三十一日 発行

編集 宮崎県立図書館
刊行

〒八〇〇〇三

宮崎市船塚三丁目二一〇番地一

TEL〇九八五―二九―二九一一

印刷 株式会社ヒダカ印刷

〒八〇〇〇八六二

宮崎市潮見町一三番地五

TEL〇九八五―二八―四一一三

(非売品)

No.

©2015 宮崎県立図書館